

2023年度

エヌアイイー

愛媛県NIE実践報告書



Newspaper in Education

教育に新聞を

愛媛県NIE推進協議会

目 次

◆実践報告

[小学校]

- ◇紙×デジタル 全学年でスクラップ ～他者と関わり学びを深めるNIE～
西条市立吉岡小学校 …… 2
- ◇確かで豊かな読解力と論理的な思考力の育成 ～NIEと児童同士の対話を通して～
東温市立南吉井小学校 …… 6
- ◇新聞に親しみ、他者との関わりの中で学びを深めるNIE
西予市立皆田小学校 …… 10
- ◇ヒストリア小野「過去からつながる歴史ストーリー」
～葉佐池古墳の探究から地域の未来像を考える～・総合的な学習の時間
松山市立小野小学校 …… 14
- ◇自分の言葉で世界を広げる子どもの育成 ～新聞を活用した国語科の学習を通して～
愛媛大学教育学部附属小学校 …… 18

[中学校]

- ◇想いを精選 新聞づくりで自己表現力向上 ～NIEを活用した人権啓発活動～
四国中央市立三島南中学校 …… 22
- ◇全教科制覇！ 学校を挙げてNIE ～教員の体制づくりとICT活用～
松前町立松前中学校 …… 26
- ◇社会への関心を高め、自分の考えを表現できる生徒の育成
～長～い廊下でN-1グランプリをやってみた～
内子町立内子中学校 …… 30
- ◇NIE活動を通して行う生徒と地域の未来づくり
～読み取る力・判断する力・表現する力・ふるさとを愛する思いの育成を目指して～
松山市立久谷中学校 …… 34
- ◇読み手の立場を超えて取り組む探究活動
～読者・記者・取材対象者 三者の視点で考える～
愛媛大学教育学部附属中学校 …… 38

[高等学校]

- ◇進路実現につなげるNIE ～学問領域を見据えた探究活動から～
愛媛県立松山北高等学校 …… 42
- ◇「個別最適なまなび」と「協働的な学び」を通して
～新聞から学ぶ地域問題解決策—NIEの活用～
愛媛県立伊予高等学校 …… 46
- ◇新聞を視覚障がい生徒の「生きる力」に ～誰一人取り残さない教育を目指して～
愛媛県立松山盲学校 …… 50
- ◇委員名簿 …… 54

※2023年度愛媛県NIE実践報告書は、
右記ホームページからもご覧いただけます。



愛媛県NIE推進協議会
ホームページ

紙×デジタル 全学年でスクラップ

～他者と関わり学びを深めるNIE～

西条市立吉岡小学校／教諭 杉野 あかね

1 はじめに

本校では、学校教育目標「いきいき わくわく 吉岡っ子」のもと、三つの児童像「進んで意欲的に学ぶ子」「やさしく思いやりのある子」「元気でねばり強い子」を掲げ、児童同士の対話と協働を大切にした『学びあい学習』を実践し、一人一人が『分かる、できる』喜びを味わい、いきいきと自己表現できる児童の育成を目指している。

2 取組のねらい

本校児童は、令和4年度全国学力・学習状況調査の結果から、「読むこと」「書くこと」が課題となっている。新聞記事は論理的に展開されており、リード文では情報が簡潔に整理されている。そのため、児童が新聞の構成や特徴を学ぶことは、文章の論理的な読み取り方や書き方を養うことにつながると考え、NIE活動のねらいを「新聞に親しむ態度の育成」「読解力の育成」「自分の考えを論理的に発信する力の育成」の3点に設定した。

3 取組の概要（1年目）

(1) 新聞出前講座の実施

新聞の構造や特徴、工夫など、新聞への理解を深めるため、愛媛新聞社の記者を講師に招き、学年に応じた講座を実施した。低学年では、写真に注目して新聞をスクラップし、感想や考えを書き込むことに取り組んだ。グループで行うことにより、新聞記事を多面的に見ることができ、表現する楽しさを味わった。中学年では、総合的な学習の時間で調べたことを新聞にまとめた。

これまでの学習でも新聞にまとめる活動を行っていたが、5W1Hの構成を意識して文を書くと、自分の調べた内容が伝わりやすくなることに気付く学習となった（資料1）。

高学年では、取材の仕方や記事の書き方を教わり、取材体験を行った。取材をする時の質問の深め方やメモの取り方、集めた情報を整理する過程を追体験することができた。

(2) 百マス作文の取組

伝えたいことをより明確にし、まとまりのある文章が書けるようになることをねらいとして、新聞記事の構成を百マス作文に取り入れた。これまではずぐに本文に入っていたが、題材が決まると、まず、5W1Hの視点で出来事を思い起こさせ、短い言



【資料1】出前講座の様子(中学年)

葉で整理させていくようにした(資料2)。

次に、それらの順序を検討し、リード文にまとめることとした。リード文を書くことで、本文の全体像をイメージさせた。

そして、リード文をもとにしながら本文を書き上げるが、必ず、自分の感想や考えを入れるようにした。

また、本文の内容を五・七・五形式にまとめたり、自分が伝えたいことをキーワードとして見出しに表したりしている(資料3)。



【資料2】5W1Hで整理する



【資料3】百マス作文(3年児童)

(3) デジタルスクラップの取組

記事に触れることで読み取る力を養ったり、児童の興味を広げたりするために、新聞スクラップに取り組んだ。当初、低学年では紙面から気になった写真を切り抜いてワークシートに貼り、写真を選んだ感想を書くようにしていた。また、中学年以上は、デジタル配信された記事(eスタ『記事を読む』)から気になるものを取り上げ、デジタルスクラップとしてタブレット上のシートに選んだ理由などをまとめたり、読んだ感想をジャムボードで共有したりするようになっていた。

しかし、取組を進める中で記事の読み取りに課題が見られたため、読み取りにも5W1Hの視点を取り入れることとし、全校で統一したデジタルスクラップ用シートを作成した。作成したシートは2枚構成で、1枚目に記事を5W1Hで読み取り、新聞記事の要点に注目しながら情報を収集できるようにした(資料4)。2枚目のシートには、記事に使われている写真を貼り付け、読んだ感想をまとめた(資料5)。要点をまとめた後に記事の感想を書くので、記事に関する考えや思いが明確になり、伝えたいことの方がはっきりしてきた。また、デジタルの場合、友達の良いスクラップに「グッドボタン」を押して評価したり、付箋機能を使って感想を伝えたりすることが容易である(資料6)。こうしたデジタルの即時性や双方向性を活用することで、相手に分かりや

●見出し	たいわんでどうぞおんせんアピール
●記事の内容	
いつ	2月9日
どこで	たいべいし
だれが	たいわんかんこうきょく
どうした	ランタンフェスティバル
なぜ	げんしょうせつをいいうため
どのように	ランタンをかざって

【資料4】5W1Hを整理する



【資料5】記事を読んだ感想(1年児童)



【資料6】グッドボタン

【資料6】グッドボタンを押して評価したり、付箋機能を使って感想を伝えたりすることが容易である(資料6)。こうしたデジタルの即時性や双方向性を活用することで、相手に分かりや

すく表現しようという意欲の喚起を図った。

(4) クミハンの取組

学習のまとめや行事等の自分の大切な思い出の表現として、タブレットで作れる新聞制作ソフト（クミハン）を活用し、全学年が新聞づくりに取り組んだ（資料7）。新聞づくりでは、百マス作文の手法と関連させることを意識した。

まず、学習の様子や行事等の思い出を思い起こすために写真を手掛かりとしてイメージマップを作った。イメージマップを参考にしながら出来事を5W1Hでまとめ、リード文に表した。

次に、下学年は、リード文をもとに思ったことや感想を入れて記事にしていき、上学年は、一番伝えたいことを明らかにするために、ペアで互いにインタビューを行ってから記事を書くようにした。

そして、記事のキーワードを用いて見出しを付けて完成である。これまでに取り組んできた百マス作文や新聞スクラップと関連させることによって、新聞づくりを効果的に進めることができた。また、全校児童が制作した新聞を校内で一堂に掲示したところ、児童は、友達の新聞と自分の新聞とを比べながら読んだり、他学年の新聞に興味深く読んだりしていた。

(5) 他学年との関わり

入学した直後の1年生にも新聞の良さや楽しさを知ってもらおうと、6年生が子ども



【資料8】1年生と6年生との関わり

も新聞記事を説明したり、知っている文字を探す活動を行ったりした（資料8）。6年生の中には、1年生の興味や関心を聞いて記事を選んでいる姿もあった。1年生も6年生との交流を楽しみにしており、記事の読み聞かせを真剣に聞いたり、記事に関するクイズに生き生きと答えたりしていた。6年生との交流を通して、1年生も新聞に関心を持つようになり、新聞コーナーで、気になる昆虫の写真を見つけて食い入るように記事を読んでいる児童の姿があった。



【資料7】クミハン(3年児童)

4 取組の概要（2年目）

(1) 研究のねらい

1年目のN I E研究の課題をもとに、2年目の研究の内容を以下の2点とした。

1点目は、更なる読解力の育成である。新聞記事を適切に読み取るためには、児童に語彙力が必要であり、新聞を難しいと感じている児童に対して発達段階に応じた手立ての工夫が必要であると考えた。

2点目は、友達の選んだ記事に関心を持ち、新たに自分の知識や表現方法を広げていこうとする態度の育成である。児童に身に付けさせたい力をより明確にするため、デジタルスクラップを効果的に活用する方法について研究を進めたいと考えた。

以上、2点の課題解決を目指して、2年目の実践に取り組んだ。

(2) 読解力の育成

中・高学年児童が、低学年児童の語彙力を補うために、デジタルスクラップの仕方をサポートする活動を行った。低学年児童がリード文の中から5W1H全てを見付けるのは難しいため、4W（いつ・どこで・誰が・何をした）を取り出すようにした。また、低学年児童は一人で記事を読むことも困難なため、上学年児童が事前に記事を読み込み、低学年児童に記事の概要を説明しながら読み取りを進めた。

(3) 自分の知識や表現方法を広げていこうとする態度の育成

前述の他学年交流とは別に、自分の考えや思いを発信する場として、お薦めのデジタルスクラップを紹介し合う機会を設けた。その際に自己評価（資料9）で活動を振り返るようにしたことで、めあてを持って相手の発表を聞くことができた。児童は、相手が紹介した記事に関心を持ち、伝え方のコツをつかんで、次の交流活動につなげることができた。

1年生と1分間スピーチ	
めあて	1年生に分かりやすく説明しよう。
話す	話す速さや資料の見せ方に気をつけましたか。 (笑顔)
	難しい言葉を分かりやすい言葉に変えましたか。 (涙)
聞く	記事に興味を持ちましたか。 (怒り)
	新しく知ったことはありますか。 (笑顔)
	感想を書きましたか。 (涙)

【資料9】自己評価シート

5 成果と課題

(1) 成果

- 新聞記事の構造（見出し、リード文、5W1H等）を学んだことで、より伝えたいことを明確にし、5W1Hを意識して読んだり書いたりするようになった。
- スクラップシート（記事・感想）を共有する場として他学年との交流の機会を全校で設けたことで、自分の考えや思いを広げ、相手を意識した自己発信力が高まった。
- 百マス作文やスクラップの作成のポイントを新聞（クミハン）制作にも生かすことで、児童がそれぞれの学習活動を関連付けて取り組むことができた。
- NIEを通じた他学年との交流活動により、読解力を育成しながら、新聞が身近なものだと感じられる児童が増えた。
- スクラップを紹介し合ったことで、交流する学年の児童を意識して言葉を精選し伝わるかどうかを確認するなど、自分の考えや思いを広げながら適切な言葉を選んで表現できるようになった。

(2) 課題

- デジタルだけでなく紙面の新聞の良さを生かした取組には、まだまだ可能性がある。それぞれの良さを大事にして実践を継続したい。
- 児童の成長の様子を見取るためには、活動を計画的・継続的に行う必要がある。活動を精査し、より効果的な学習となるようにしたい。

確かで豊かな読解力と論理的な思考力の育成

～N I Eと児童同士の対話を通して～

東温市立南吉井小学校／教諭 堀 悠介

1 はじめに

(1) 学校の概要

本校は、児童数560名の中規模校である。校区は、松山市に隣接する東温市西部に位置しており、自然環境に恵まれている。児童は明るく素直で、「挨拶日本一」を目指して運営委員会が毎朝挨拶運動に取り組んでいる。昨年度からN I E実践指定校となり、全校や各学年で様々な取組を行ってきた。紙の新聞だけでなく、愛媛新聞 for スタディ（通称◎スタ）を活用しながら、対話を中心に据えた実践を積み重ねている。

(2) 学校の目指す児童の姿

目指す児童の姿を「思いやりのある優しい子」「自ら学ぶ賢い子」「チャレンジする子」とし、学校の教育目標を、「よく学び、心豊かにたくましく生きる児童の育成」と掲げている。

(3) 学校におけるこれまでのN I E活動

昨年度9月より、愛媛新聞、日本経済新聞、産経新聞、および子ども向けの毎日小学生新聞、朝日小学生新聞の提供を受け、学習活動に有意義に生かしてきた。児童にとって、大人向けの新聞を読むことは少し難しかったが、小学生新聞には関心をもたせることができた。そのような実態を踏まえ、本校では主に小学生新聞を扱い、児童の新聞に対する興味・関心を高める工夫をしてきた。新聞は授業で活用するだけでなく、教室や廊下の掲示、昼の放送や委員会活動などでも積極的に活用している。

2 実践の内容

(1) 新聞に慣れ親しむための取組

ア N I Eコーナーの設置

児童がよく通る廊下にN I Eコーナーを設置し、全校児童が日常的に新聞に目を通せるようにした。低学年・中学年・高学年に分け、輪番制で掲示物を作成した（資料1）。各クラスが創意工夫を生かした掲示物に仕上げしており、読んだ感想を自由に書けるようにホワイトボードを設置する工夫もした。児童が普段から通る場所に掲示物を配置しているので、目に触れる機会が自然に増えた。



資料1 N I Eコーナー

イ バックナンバーコーナーの設置

図書館前には、新聞社ごとにバックナンバーコーナーを設け、いつでも過去の新

聞記事を読んだり、切り取ったりすることができるようにした。休み時間には、新聞スクラップに使用する記事を取りにくる児童が多く見られた。

ウ NIEタイムの設定

週1回、「NIEタイム」と題して、朝の10分間、新聞に触れる活動を行った。新聞記事を基に、スピーチをしたり、記事の内容を紹介したりする活動を取り入れた。また、「@スタ」を活用して、過去の記事を読んだり、記事の読み取りに取り組んだりした(資料2)。最新のニュースがリアルタイムで読めるだけでなく、コラムが充実していることもあり、児童の学習意欲の向上および読解力の向上につなげることができた。

エ NIE放送

お昼の放送の時間を活用して、放送委員会の児童が関心をもった新聞記事を紹介している(資料3)。記事を要約し、その記事について考えたことや感想などを伝えるようにしている。放送を楽しみにしている児童が増えており、放送内容から対話が深まる場面も見られた。

(2) 読解力・思考力等を育むための取組

ア NIEタイム

(ア) 低学年の実践

新聞記事の切り抜き記事を見せながら教員が読み聞かせをした。読み聞かせする記事は、生き物やイラスト、4コマ漫画など、親しみやすいものを中心に選んだ。新聞に関心をもつようになった。

(イ) 中学年の実践

@スタの「がくしゅうちょう」機能を使った記事の読み取り練習を行った(資料4)。記事を読むことで、読み取る訓練になるだけでなく、幅広い分野の知識を得ることにつながった。

(ウ) 高学年の実践

@スタの新聞記事を1つ読み、その記事の要約と感想を書かせた。初めは要約に時間が掛かっていたが、徐々に短い時間で端的な文章にまとめられるようになった。活字から情報を得ることで、読解力・書く力の向上という点に関して一定の成果を感じた。また、「気になるニュース」と題してスピーチを行った。



資料2 @スタの画面



資料3 NIE放送をする児童



資料4 「がくしゅうちょう」の記事

イ 掲示物の工夫

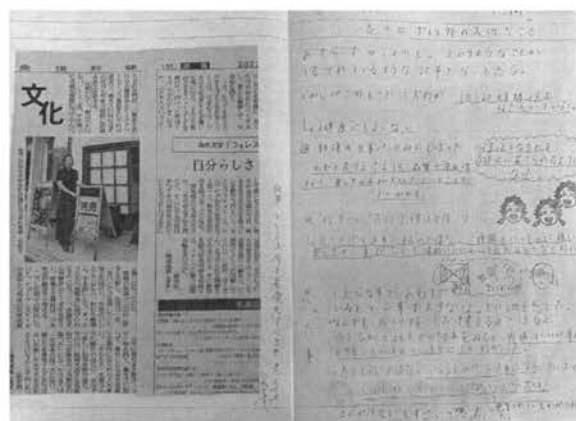
児童が日常的に新聞に親しめるよう、子ども新聞を中心に廊下に掲示するようにした。そして、関心をもった新聞記事にシールを貼るようにし、友達の興味が集まっているものが視覚的に分かるように工夫した（資料5）。その結果、新聞記事を読むことに抵抗のある児童も継続して読めるようになってきた。



資料5 子ども新聞にシールを貼る児童

ウ 週末課題「新聞スクラップ」

毎週末の課題として、新聞スクラップに取り組んだ。ノートの左側に気になる新聞記事を貼り、右側に「新聞名」「日付」「オリジナルタイトル」「思ったことや感じたこと」を書かせた（資料6）。作成したスクラップを隣の席の児童に紹介し、一言感想を伝える活動を一連の流れとしている。また、他学年の児童が見ることができるように掲示した。



資料6 新聞スクラップの実際

(3) NIEと児童同士の「対話」を組み込んだ授業実践

ア 低学年の実践

(ア) 好きな記事ベスト3

子ども新聞および◎スタを活用して、自分が好きな記事ベスト3を選ばせた。ワークシートにその理由を記入させ、小グループで記事を紹介し合い、互いの考えを共有させた。

(イ) 図画工作科「しんぶんとなかよし」

新聞紙を丸めたり破ったりするなど、新聞紙と触れ合った（資料7）。新聞で遊ぶ中で、書いてある内容についての対話が生まれた。



資料7 新聞紙の部屋を作る様子

イ 中学年の実践

(ア) 国語科「聞き取りメモの工夫」

メモの取り方を学び、実際に校内の教員に取材した。取材したことを、◎スタ「クミハン」機能を使って、新聞にまとめた。新聞にまとめる際、話し合いを通じて、見出しの付け方やレイアウトの仕方について考えを深めることができた（資料8）。



資料8 取材内容を基に話し合いをする児童

(イ) 社会科「紙のまち四国中央市」

ロイロノートの中に新聞のひな形を作っておき、児童に学習した内容をまとめさせた。その後、作成した新聞を掲示し、「新聞グランプリ」と題して児童同士が相互評価する機会を設けた。

ウ 高学年の実践

(ア) 社会科「世界に歩み出した日本」

愛媛新聞社提供の過去の新聞記事（愛媛県の水平社支部発会式を伝えた海南新聞の記事を分かりやすく書き直したもの）を活用した。過去の新聞記事に触れ、話し合うことで、当時の時代背景を理解するとともに、自分が住む地域に対する誇りを抱くことができた。

(イ) 総合的な学習の時間「よしいの防災探検隊」

4人グループで、台風や地震など関心をもった災害について、新聞記事を参考にしながらタブレットを活用して新聞作成を行った。児童同士が話し合いながら、同時進行で新聞作成に取り組むことができるため、短時間で1つの新聞を作成することができた。

3 全国大会を終えての成果と課題

(1) 成果

- 全国大会後もN I EコーナーやN I Eタイムなどで新聞を活用し続けることで、文字を読むことに対する抵抗感がさらに緩和し、多くの児童が進んで新聞を手にする姿が見られ始めた。
- 各教科で学習したことを新聞にまとめることで、新聞の仕組みを理解し、文章を要約する力やまとめる力が確実に身に付きつつある。
- 新聞を媒体として対話を組み込んだ授業を展開することで、児童の多様な意見を引き出し、活発な意見交換につなげることができた。意見を練り合う過程において、思考力の育成にもつながった。

(2) 課題

- 今後も授業の中で計画的に活用していくために、単元計画を立てたり、日々の教育活動に関連する新聞記事を収集したりしておく必要性を感じた。
- N I E活動をより効果的に継続していくために、研究の成果を再度検証し、その教育効果について共通理解することでより魅力的な実践になると考えている。

新聞に親しみ、他者との関わりの中で学びを深めるN I E

西予市立皆田小学校／教諭 岩本 千香

1 はじめに（学校紹介）

本校は、愛媛県南部に位置し、全校児童64名の小規模校である。学習にまじめに取り組む児童が多いが、考えを簡潔に文章で表したり、分かりやすく他者に伝えたりすることに課題がある。新聞は、限られた紙面で必要なことを伝え、地域に根差した確かな情報が豊富なメディアである。その新聞に触れることは、言語表現力・文章表現力を向上させ、ふるさとを愛する子どもの育成に有効であると考え。また、学びの中で、他者との関わりを積極的に設定することで、自分の考えをさらに深めることができると考える。

2 学校としての取組

- (1) 全学年でスクラップ活動を行う。（1週間に1回）
- (2) 全学年、新聞や◎スタを使用して研究授業を行い、研修を深める。など

3 実践事例

(1) 全学年での取組

ア スクラップ

1週間に1回、新聞から気になる記事を切ってノートに貼り、要約や感想を書く活動を行った。

<始めたころ>



(よかった点)

- ・新聞を手取ることに抵抗感がなくなった。
- ・行事で時間がなくなった時「今週はスクラップしないんですか。したいです。」という声が聞かれた。

(気になった点)

- ・多数の児童が、写真を切り取って貼るだけだったので、学力向上につながるのか疑問であった。

<半年ほど経ってから>



(よかった点)

- ・高学年では、5W1Hを意識して、内容を要約する文章が書けてきた。
- ・長い記事を読んで感想を書くことができ始めた。

(気になった点)

- ・自分の興味でスクラップするので、選ぶ記事の内容に偏りが見られる。
- ・要約をする時、安易に記事を丸写しする場合がある。

イ 他学年とスクラップ交流

(ア) 5年生から2年生へスクラップ紹介

国語科「よりよい学校生活のために」との関連

よりよい学校生活を送るために解決したい議題を見付け、話し合うという単元。議題「他学年ともっと仲良くなるためにはどうしたらいいか」の決定後、2年生とはあまり遊んでいないという意見が出たので、2年生にスクラップを紹介しようと持ちかけた。

(条件1) 2年生が興味を持てるような内容であること

(条件2) 2年生に分かる言葉で紹介すること

(よかった点)

- ・相手の興味関心を考えて記事を選択することで、読む内容が広がった。
- ・記事の丸写しではなく、低学年に分かりやすい言葉で要約しようとする児童が増えた。(祭りが開催された→祭りが開かれたなど)
- ・話したことのない2年生と話すことで、お互いの心の距離が縮まった。



その後、学期に1～2回、全校児童でスクラップ交流会を行った。

(2) 各学年の取り組み

ア 3年生の取組

総合的な学習の時間「地域のよさを探検し、発信していこう」という単元の中で、校区にある3つの施設へ見学に行って新聞にまとめた。

(ア) NIEとの関連

◎スタの新聞制作ソフト「クミハン」を活用して、新聞にまとめた。その後、書いた記事の内容について、「地域の良さが伝わるような記事になっているか」の視点でアドバイスし合った。

(イ) 感想

クミハンを活用すると、手書きの新聞に比べ、子ども同士で読み合い、話し合う時間が確保できた。そのことで、友達の意見を生かしたより充実した内容の記事を完成させることができた。



イ 2年生の取組

生活科「おカイコさんとなかよくなろう」では、「カイコの飼育や飼育から発展した活動（本や新聞を活用した調べ活動やまゆからの物づくり活動）を通して、カイコのすばらしさにたくさん気付き、新聞にまとめて地域の人に伝えようとする事ができる」という目標で取り組んだ。

次	時間	学習内容	評価の観点			評価規準
			①知識技能	②思考力・判断力・表現力	③学びに向かう力・人間性	
1 育てる	6	<ul style="list-style-type: none"> ・おカイコさんについて知り、世話をしたり観察をしたりする。(世話は毎朝) ・おカイコさんについて、調べる。 ・おカイコ農家の松山さんに質問を考え、見学に行く。 【NIE：松山さんの記事】 ・西予市の養蚕について知り、お礼の手紙を書く。 	◎	◎	○	<ul style="list-style-type: none"> ①カイコを飼育する活動を通して、カイコが成長していることや生命を持っていることに、気付いている。 ②カイコを飼育する活動を通して、カイコが育つ環境、変化や成長の様子に関心を持って働きかけている。 ③カイコを飼育する活動を通して、カイコへの親しみをもち、カイコを大切にしようとしている。
	2		◎	◎	○	
2 つくる	4	<ul style="list-style-type: none"> ・まゆで生糸取りをして、ランプシェードをつくる。 ・まゆ細工をつくる。(松山さんにプレゼント) ・生糸と写真を入れたお守りをつくる。 	○	○	○	<ul style="list-style-type: none"> ①糸取りをしたりまゆ細工をしたりする活動を通して、まゆのすばらしさに気付いている。 ②糸取りをしたりまゆ細工をしたりする活動を通して、よりよいものをつくろうと工夫している。 ③糸取りをしたりまゆ細工をしたりする活動を通して、大切に育てたカイコへの思いを込めてつくろうとしている。
	2		○	○	○	
3 まとめる	3	<ul style="list-style-type: none"> ・今までの活動を振り返り、おカイコさんクイズをつくる。(PCのスライドで作成) ・おカイコさんについて、新発見をする。【NIE：生糸・まゆ・糞の活用産業の記事】 ・おカイコ新聞をつくる。(校内⇒シルク博物館に掲示) 	◎	◎	◎	<ul style="list-style-type: none"> ①カイコや地域の人、「@スタ」記事との関わりを通して、カイコのすばらしさや地域の人々の思いに気付いている。 ②カイコや地域の人、「@スタ」記事との関わりを通して、自分たちの生活との関わりを見付けている。 ③カイコや地域の人、「@スタ」記事との関わりを通して、カイコや地域の人に親しみや愛着を持っている。
	1 (本時)		◎	◎	◎	
	6		◎	◎	◎	

(ア) N I Eとの関連

a スクラップより

- ・ 児童の一人がエリザベス女王が亡くなった時の新聞記事をスクラップしていた。「女王になった時のドレスに、西予市のおカイコさんの糸が使われていたと知って、すごいと思いました。」という感想を書いていたため、みんなに紹介すると、カイコが世界とつながっていることに驚いていた。

b ◎スタより

- ・ 第1次の中の「おカイコ農家の松山さんに質問を考え、見学に行く」では、見学に行く際に、◎スタの記事を活用した。児童は、「どうして真珠の仕事をやめておカイコの仕事をすることになったんですか？」など、記事の情報をもとにして質問を考えていた。
- ・ 第3次の中の「おカイコさんについて、新発見をする」では、「新聞の『◎スタ』記事から、新発見をする」という形で、教師が「カイコの新産業」について、2年生に分かる形でまとめ、クイズを出した。

c 新聞づくり

- ・ 第3次の中の「おカイコ新聞をつくる」では、学んできたことを新聞にし、参観日に掲示した。

(イ) 感想

新聞記事を活用したり、新聞づくりをしたりすることで、飼育活動だけにとどまらず、思いもよらぬカイコのすばらしさを次々と発見することができた。そして、2年生ながらに、今も発展し続けている「人とカイコの尊いつながり」について考えることができた。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・ 地域を扱った新聞教材は、自分の地域の良さを発見し、ふるさとを愛する心を育てることにつながった。
- ・ スクラップで他者と関わることで、表現力の育成が図られ、学び合う姿が見られた。
- ・ 新聞を活用して研究授業を行うことで、授業の組み立て方に幅ができ、教員の指導力の向上につながった。新聞を教育に積極的に活用することは初めての取組だったので、いろいろな方法があることを知った。

(2) 課題

- ・ N I Eの取組が、どの学年も学力向上に確実に結び付いているという実感はまだ十分ではない。学力向上に向けたN I Eの取組を今後も研修していきたい。
- ・ 子どもや教員に負担感のない、誰でもいつからでも取り組める実践を、今後も研究していきたい。

ヒストリア小野「過去からつながる歴史ストーリー」

～葉佐池古墳の探究から地域の未来像を考える～ ・ 総合的な学習の時間

松山市立小野小学校／教諭 今井 互郎

1 はじめに

本校は、創立134年目を迎えており、児童数890名（令和6年2月末現在）、学級数は34学級を数える大規模校である。道後平野東部、小野川の上流域に位置する田園風景が残る自然豊かな地区に立地しており、豊かな自然に囲まれている。また、国指定の史跡である葉佐池古墳をはじめとする遺跡や神社、常夜灯等、地域の方々が大切に守り受け継いでいる貴重な歴史的遺産も豊富にある。本校の敷地内には、かつて「与力松」と呼ばれるクロマツの巨木があり、1948年に国の天然記念物に指定された。その後、松くい虫による枯死により、現在は伐採され、天然記念物の指定も解除されたが、その切り株は「与力の丘」として中庭に残され、学校のシンボルとして、児童や地域の人々に親しまれており、よりきを使った「よく考えがんばる子 りっぱな行いやさしい子 きまりを守る元気な子」という校訓は現在も受け継がれている。

2 これまでのN I Eの取組

本校では、令和3年度よりN I E全国大会松山大会に向けての研究をスタートした。初年度は、N I Eの教育活動への導入を行い、教科等の学習はもとより、朝の10分間（よりきタイム）の時間を中心に、「愛媛新聞forスタディ（@スタ）」を活用し、新聞記事に親しませた。一方、新聞紙面は、高学年の児童の視野に入る場所に常に配置し、いつでも読める環境づくりを心掛けた。また、家庭学習では、関心のある記事の概要や感想を書き、ファミリーフォーカスを実施したり、タブレット端末の共有ノートを用いて友達との交流を行ったりして、多様な意見に触れさせることができるようにした。

令和4年度は、よりきタイムの活動等を継続しながら、総合的な学習の時間や国語科等で、新聞やI C Tを活用した授業実践を行い、自己発信力の育成とその向上を目指した。学年の発達段階に応じて、新聞活用学習、新聞制作学習、新聞機能学習を効果的に取り入れ、教材・教具や学習ツールの一つとしてI C Tを積極的に活用することで、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて授業改善を行った。

令和5年度には、大会テーマ「I C TでひらくN I E新時代」の下、授業実践を積み重ねた。1学期より新聞やI C Tを効果的に生かした授業づくりに取り組み、授業改善を図った。特に、@スタと新聞紙、I C T活用の組み合わせ方等、より効果的な学習の手段を児童が取捨選択できるようにしたり、学習方法を複線化して児童の多様な考え方や理解の仕方に応えたりするなど、アナログとデジタルのベストミックスを探って取り組んだ。

3 N I E全国大会松山大会 公開授業における提案

(1) 児童について

本学級の児童29名は、明るく素直で、何事にも真面目に取り組む良さがあり、友達の話を共感的に聴き合う態度が育ちつつある。しかし、児童が主体的に、友達と関わって学び合う力は十分育っていない。また、学んだことを自分の言葉で自分らしく

発信することを苦手とする児童も多いというのが課題となっている。

NIEに関しては、朝の常時活動や過年度の取組を通して、新聞に触れる機会は多くなってきているが、進んで新聞紙面を読む習慣は未だ定着していない。また、地区に長く居を構える家庭が多い上、幼少時より地域独自の行事等が催されているため、地域への愛着が強い児童が多い。ただ、地域にある遺跡の価値や地域の有志がその保全に取り組んでいることなどには気付いていない。

(2) 単元について

本単元は、地域の著名な遺跡を見学したり調べたりする活動等を通して、地域に対する理解と愛着を深めるとともに、自分たちが生活する町をより良くしていくために、児童一人一人が「小野の未来像」を考えることをねらいとしている。さらに、自らが掲げた「小野の未来像」実現のために、その様子をイラストに表したり、自分にできることを具体的に行動化したりすることも目指している。また、実際に地域の遺跡を守り、その伝承のために努力している人々や地域おこし等に取り組む団体との交流を通して、地域を愛する人々の思いや願いを知り、より地域を大切にしようとする心情を育むことができる単元である。

(3) 本時について

本時は、古墳の見学や諸団体との交流、家庭でのインタビュー等からの知見や課題を整理し、自らが考えた「小野の未来像」を、町のキャッチフレーズとイラストとともに紹介する。その際、そう考える根拠として、過去の新聞記事や学習の過程で出会った人々の思いや願い、活動等を取り上げる。さらに、個々の考えを踏まえ、より良い「小野の未来像」について、シンキングツールを活用しながらグループで話し合う。また、ゲストティーチャーとの交流の場を適宜設けることで、学習意欲の喚起も図りたい。

4 本時指導案

(1) 単元の目標

- 自分で課題を見付けて調べたり伝え合ったりする活動を通して、地域の歴史や人々の思いに触れ、地域を大切にしようとする心情を持つことができる。
- 地域の歴史や人々の思いについて学習したことを生かし、「小野の未来像」に向けて自分にできることは何かを考えて行動しようとする。

(2) 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> ○地域には、貴重な遺跡があり、それを守るための人々の活動や思いを理解している。 ○地域の歴史を学ぶ過程で知ったことなどに基づいた課題を設定している。 ○見通しを持ち、課題解決に必要な情報収集を行っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○問題解決に向けて方法や手順を考えている。 ○情報を整理・分析したり、比較したりして、問題解決に向けて考えを深めている。 ○既習の知識と新しい発見等を結び付け、自らの考えを発信しようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○問題解決に向けた自己の取組を振り返り、進んで探究活動に取り組もうとしている。 ○自他の考えを生かしながら、学び合おうとしている。 ○「小野の未来像」に対して、自らの考えを持ち、実践しようとしている。

(3) 単元指導計画（全34時間）とNIEとの関連(☆)

小單元	1 葉佐池古墳を調べよう。 (11時間)	2 地域の史跡を調べよう。 (13時間)	3 学んだことを未来につなげよう。(10時間)
主な活動とNIE関連	(1) 葉佐池古墳見学④ ☆◎スタ活用（記事検索） (2) 葉佐池古墳調べ② ☆◎スタ活用（記事検索） (3) 分かったことや調べたこと の新聞制作④ ☆愛媛新聞社出前授業 ☆新聞制作(クミハン) (4) 新聞発表① ☆制作した新聞の発表	(1) 小野検定受検① (2) 小野の史跡や伝承調べ④ ☆◎スタ活用（記事検索） (3) 松山北高・郷土研究部「小 野小町伝承」出前講座① (4) 紙芝居観覧① (5) 葉佐池くらぶとの交流① (6) まとめ④ ☆新聞制作（クミハン） (7) 発表① ☆制作した新聞の発表	(1) 「小野の未来像」に関する 考えの整理③ ☆◎スタ活用（記事検索） (2) 「小野の未来像」に関する 考えの発信① (本時) ☆◎スタ活用（記事活用） (3) 未来の小野のためにできる ことの提案② (4) 提案に基づく活動④ ・地域ボランティア ・紙芝居制作 ・小野検定作成 等
かかわり	○葉佐池くらぶ ○松山市考古館学芸員 ○愛媛新聞社出前授業	○松山北高・郷土研究部 ○葉佐池くらぶ ○紙芝居研究会のぼ～る	○葉佐池くらぶ ○紙芝居研究会のぼ～る ○本校卒業生

5 本時の指導

(1) 目 標

地域の歴史や人々の思いについて学習したことを踏まえて考えた「小野の未来像」を発表し、小野のより良い未来について話し合うことができる。

(2) 準備物

【児童】 タブレット、参考資料 【教師】 指導者用タブレット

(3) 展 開

学習活動と児童の意識の流れ	指導上の留意点（◎評価）
1 前時までの学習を振り返り、本時のめあてを確認する。 「小野の未来像」を発表し、小野のより良い未来について話し合おう。 ～小野の未来をこうしたい！～	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習展開を説明し、見通しを持たせる。 ・ゲストティーチャーと役割を紹介し、学習意欲を高める。
2 自分が考えた「小野の未来像」について根拠となる資料を提示しながら発表する。 <ul style="list-style-type: none"> ・新たに遺跡が発見されて有名になりそうだ。 ・新しいものと古いものが両方あるすてきな町になっていくよ。 ・少子高齢化が進むから、人口が減って寂しくなっていく可能性もあるよ。 ・小野地区の祭りや夜市等が復活しているよ。「小野らしさ」のある町になるよ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各自の考えと新聞記事等の資料を関連付けて発表させる。 ・質疑の時間を設け、発表内容の理解を深めさせる。 ◎既知の内容や経験を踏まえて「小野の未来像」を発表できる。
3 発表された「小野の未来像」を基にして、より良い「小野の未来像」について話し合う。 <ul style="list-style-type: none"> ・〇〇さんの意見がとても心に残っているよ。そんな町になっていく気がするな。 ・「歴史を見る町、語る町」というフレーズがあったね。そんな町になっていくと思うな。 ・身近なところに、新しい店や建物ができているから、若い人に人気がある町になりそうだよ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・シンキングツール（共有）を活用し、各グループでより良い「小野の未来像」について話し合う。 ◎「小野の未来像」について、考えたり発言したりすることができる。

<p>4 各グループで話し合ったシンキングツールのシートを提出し、発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地元の人が活躍する人情豊かな町になる。 ・地域の遺跡をアピールした歴史の町になる。 ・少子高齢化で人口が減っても、今と変わらない心の温かい人がいっぱい町になる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・班長に話し合いの結果を発表させる。 ・少子高齢化等の課題も投げ掛けていきたい。 ・ICT支援員が機器操作をする。
<p>5 ゲストティーチャーの感想を聞く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・葉佐池くらぶ主催のレンゲソウ祭りを復活したり、地域独自の行事を受け継いだりしてほしい。 ・地域の歴史に関心を持って、自分なりの手段で次の世代に伝えてほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲストティーチャーには、児童の活動の様子を見た感想や今後の願い等を自由に述べていただく。
<p>6 本時の振り返りを行い、次時の見通しを持つ。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>私のえがく「小野の未来像」の実現に向けた行動計画を立てよう。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・葉佐池くらぶは、会員の高齢化が原因で活動をお休みしているから、手伝いたい。 ・紙芝居を作って、小野のことを伝えたいな。 	<ul style="list-style-type: none"> ・次時の学習内容を知らせ、見通しを持たせる。 ・タブレットを活用し、アンケートを実施する。 ・ICT支援員は、授業評価アンケートの結果を提示する。

6 成果と課題 (成果○/課題●)

- 児童が「小野の未来像」を発言する際に、意見の根拠として、新聞を活用したことで、根拠を明確にして自分の考えを話すことができた。
- 小野の未来像について自分事として捉えることで、地域に対する理解が深まり、自分の将来像と重ね合わせることを通して、地域に対する愛着が深まった。
- Web会議やプロジェクターの効果的な活用、シンキングツールの活用により、自分の考えを表現するのが苦手な児童の自己表現の場が多く見られた。ICT活用により、多様な考えを引き出し、より良い未来像についての意見が共有できた。
- 全校体制でNIEに取り組んだことで、発達段階に応じた活動ができ、新聞に対する親しみや愛着を感じたり、新聞記事の確かさを実感したりすることができた。
- 児童のアンケート結果からは、◎スタの利用による新聞記事への慣れ親しみを感じることができたが、家庭での新聞購読率の増加には至らなかった。今後も継続的な取組を通じて新聞の良さを身近に感じる必要がある。
- ◎スタのクミハンを利用することで、新聞づくりの時間を短縮することができるとともに、限られた時間内に多くの児童が新聞を作ることができるようになり、書くことを苦手にしてきた児童の表現力が豊かになった。
- 紙の新聞を図画工作科の作品づくりの素材として使った取組を行ったり、国語科で新聞紙から文字を探したりする活動を実施し、紙の新聞を身近に感じることもできた一方で、図書室前に新聞を置いて自由に閲覧する活動を行ったり、児童の必要感に迫れず、利用率が上がらなかった。
- 朝の10分間（よりきタイム）の時間を中心に、「愛媛新聞forスタディ（◎スタ）」を活用し、新聞記事に親しませることができたが、総合的な学習の時間などの単元が終わると利用率が低下していた。児童が主体的に◎スタを活用できるように、◎スタのコンテンツを紹介して、主体的な利用につなげられると良かった。

自分の言葉で世界を広げる子どもの育成

～新聞を活用した国語科の学習を通して～

愛媛大学教育学部附属小学校／教諭 幸島 恭輔

1 学校としての取組

本校では、附属五校園の共通教育理念である「未来を拓く人材の育成」の下、互いに連携を図りながら教育活動を進めている。今年度、本校研究主題を「子どもが創る『探究的な学び』をデザインする」として、子どもが、学びの主役として探究心を持って問いに立ち向かう姿を目指して、教師が子どもの学びをどのように支えていくかを探っている。

これまでも、様々な教科の中で新聞の活用を進めてきたが、NIE全国大会松山大会に向け、更に研究を深めるべく実践を重ねた。

5月に新聞について3年生にアンケートを行ったところ、普段新聞を読まないと答えた子どもが半数以上であった。新聞を身近に感じ、新聞のよさを知って生かすために、新聞を身近に感じられるよう環境を整えた。

(1) 新聞コーナーの設置

毎朝、その日の朝刊を掲示したり、過去3週間分の朝刊や「ジュニアえひめ新聞」を廊下に置いたりすることで、いつでも新聞を手にとることができるようにした(資料1)。



資料1 新聞を読む子ども

(2) 新聞記事の紹介

イベントの記事や投稿などで本学級の子どものことが新聞に掲載されたときには、学級や、全校朝会で紹介したり、記事を大きく貼り出したりした(資料2)。

このような取組の中で、子どもは新聞を身近なものに感じ、新聞を手にとる機会確実に増えており、新聞を読む「読者」として育ってきていると感じる。



資料2 全校朝会での記事の紹介

2 実践事例

新聞を読む「読者」に留まらず、「発信者」として新聞を活用し、新聞を通して「言葉の力」を実感していくための学習を3年生の国語科の授業で実践した。

子どもは自ら進んで活動したときに、学びを深めることができる。この、子どもの

「探究的な学び」を実現するために、子どもが自分なりの問いを持ち、自分なりの方法で、自分なりの解を見出す過程を大切にしたい。学びを創っていくのは子どもたちであり、子どもたちの主体的な活動の先に「探究的な学び」の実現があること、そして教師はその学びを支えていく存在であることを今回の授業でも大切にしたい。そして、子どもたちが自ら学びを創っていくために、新聞のよさを生かしながら子どもの主体的な学習を促す活動を構想した。

(1) 単元指導計画

本単元は、教科等横断の視点に立ち、総合的な学習の時間で松山の魅力を発信する活動を行う中で、国語科として育みたい「言葉の力」を子ども自らが見だし、言語活動を通してその力を育てていく。「県外の人たちに松山の魅力を伝えたい」という子どもの思いを一番に据えながら、教科を超えてその思いを実現するための学習を積み重ねていくことで、子どもは「探究的な学び」を実現し、自分の言葉で、確かに豊かに発信し、「言葉の力」を実感するはずである。

(2) 単元構想

学習の流れ	指導について
<p>○ 愛媛のよいところは何かを考える。</p> <p><子どもが感じている愛媛のよいところ></p>	<p>・社会科の学習を通して持った「県外の人に愛媛のよいところを伝える」という思いを確認して、県内のよいところは何かを挙げさせる。</p>
<p>○ 自分が伝える松山のよいところを決める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・チーム道後 ・チーム電車 ・チーム松山城 ・チームマスコット ・チーム名所 ・チーム文化 ・チーム名産 	<p>・県外の人たちに伝えるよいところを決め、チームで協力してその魅力について調べていく。</p> <p>・新聞記事の中でも愛媛や松山のよいところが紹介されていることに触れ、多様な調べ方があることに気付かせる。</p>

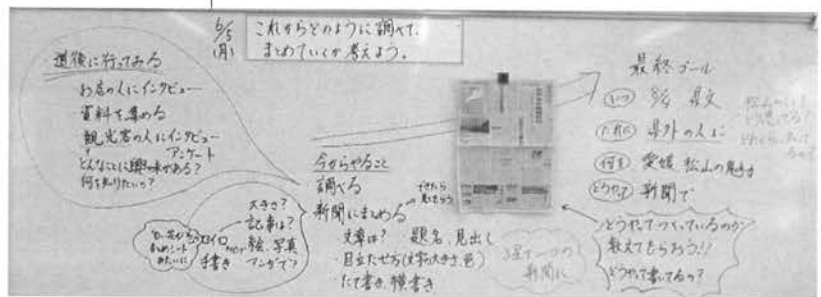
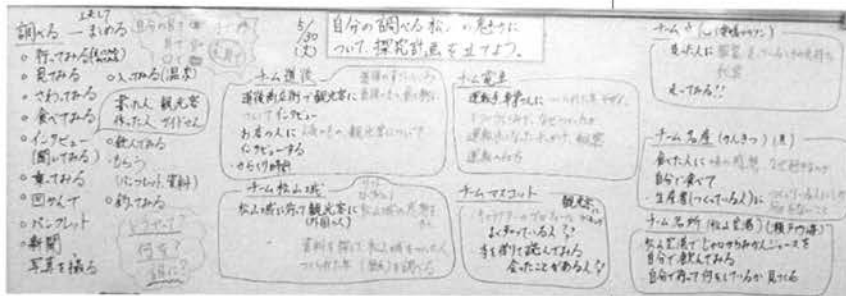
○自分が伝える松山のよいところについて調べる。

○これからの探究計画を立てる。

国語科「発見ノート」を作ろう

○ 具体的な書き方を理解し、取材して発見したことをまとめる。

- ・新聞や図書、インターネットなどで調べたり、実際に足を運んで見たり感じたりしたことを、1枚のシートにまとめる。



○ 道後の観光客にインタビューをする。

- ・松山の何に魅力を感じて訪れたか
- ・どこへ行くか (行ったか)
- ・松山の何を知りたいか

○ インタビューの内容を基に、探究活動をする。

○ 調べた内容を、新聞にまとめて発信する。

○ 本単元の学習を振り返る。

国語科「インタビューをしよう」

○ インタビューの内容を考えて、話し方と聞き方に気を付けてインタビューをする。

- ・松山に来た人の思いやニーズに合った魅力発信につながるように、質問事項を考えさせる。

- ・インタビューをすることで、読み手が何を知りたいかを意識することの大切さに気付かせる。
- ・新聞社の方に新聞の書き方の工夫を教えてください、どのようなことを意識してまとめればよいかを学ぶ。
- ・振り返りを通して、自分の言葉で発信することの大切さを自覚させる。

(3) 新聞に興味をもたせるための工夫

情報収集ができて、新聞を書き始める際に、実際の新聞ではどのような工夫をしているのかを知るために、愛媛新聞の方に来校していただき、新聞社でどのように記事を作っているかや、具体的にどのように新聞を書くのかを教えていただいた。リード文や見出しを実際に作ってみて、魅力発信の新聞作りにつながるコツを教えていただいた（資料3）。



資料3 新聞社の方による出前講座

(4) 自分の言葉を発信する機会をもたせる工夫

8月に行われたNIE全国大会松山大会では、作った新聞に見出しを付けて、その場で参観者に配った。子どもたちは、自分が作った新聞を直接手渡す活動を通して、自分の言葉を多くの方に届けられたことを実感していた（資料4）。さらに、アンケートフォームを活用して新聞を読んだ感想をいただくことで、自分の作った新聞によって松山の魅力を知ってもらえたことに喜びを感じていた。



資料4 自作の新聞を手渡す子ども

3 実践を終えて

(1) 実践前後の子どもの変化

新聞は読むものであると同時に、発信する媒体でもある。児童も初めはただただ読むだけだったが、新聞にして発信したり、詩や俳句を投稿したりしたことをきっかけに、次第に発信する楽しさを知り、たくさんの人に自分たちの言葉が届く喜びを味わっている。書く側になったときに初めて学ぶことも多く、言葉を受け取ること（読む、聞く）と発信すること（書く、話す）をバランスよく経験することが、子どもの「言葉の力」を育むことにつながると考える。新聞はそのための大きな役割を担っている。

(2) 成果と課題

- 新聞を手にとって読んだり、投稿したりすることで、子どもは新聞を身近に感じ、新聞を通して「言葉の力」を育むことができた。
- 新聞を様々な教育活動で活用するために、各教科での活用の方法を考えたり、新聞を全校の子どもたちがもっと身近に感じたりできるような仕組みを今後検討していきたい。

想いを精選 新聞づくりで自己表現力向上

～N I Eを活用した人権啓発活動～

四国中央市立三島南中学校／教諭 西田 寿

【ねらいと計画】

本校の生徒は規範意識が高く、ルールを守り、落ち着いた学校生活を送っている。また、何事にも一生懸命で学校行事は常に盛り上がりを見せている。その反面、自分を表現することが苦手な生徒が多く、学年や全校など集団の前で発表できる生徒が少ないのが課題である。そこで今回は新聞づくりを通して、自己表現力を高めるという狙いを持ってN I Eに取り組んだ。まず、新聞から学び、次に自らが新聞を作ることによって、自分の思いを伝えたり、自分を自由に表現したりできる力を身につけさせようと考えた。

【新聞から学ぼう】

最初にN I Eコーナーを設置した。全校生徒が通る階段の踊り場に設置し、中高生新聞の記事から中高生へのメッセージを掲示した。アスリートなど著名人の記事に見入っている生徒が多く見られた。

次に「私の注目記事」を実施した。実際に新聞に目を通し、自分が気になった記事を選び、自分の見解を述べた。取り上げられた記事は様々で、時事問題、自分たちが学習しているSNSマナーに関するもの、竜宮城の存在を取り上げたウミガメに関するユニークな記事もあった。この活動を通して、自分が気になる記事を探すうちに、その記事のおもしろさ、わかりやすさを探求し、新聞が持つ伝える力を感じていた。また、記事を書いた方の感性が自分に近いことや、記事の向こう側にある世界の近さを感じている生徒もいた。

【新聞を作ってみよう】

次に実際に新聞を作る活動に移った。第一弾として修学旅行新聞を作成した。シートの枠を大まかに決め、あとは自由に作るよう促した。「新聞といえば見出し！」と目を引く見出しにこだわりを持ったものや、写真を時系列に配置し、わかりやすくまとめたものもあった。修学旅行の思い出に浸りながら、友達と案を出し合いながら作成する姿が見られた。自分たちが感じた楽しさを、いかに分かりやすく伝えるか、思いを言葉にしてまとめることの難しさを感じると共に、それ以上に自分の思いが伝わり、共感された時の喜びを大きく感じられる活動であった。



生徒が作成した修学旅行新聞

第二弾として体育祭新聞を作成した。1回目でコツをつかんだのか、より自由なレイアウトが見られ、見出しの内容も個性的なものが多く見られた。また、2回目からは文書作成ソフトを活用して作成する生徒も出てきた。クイズコーナーを設けたり、自らの新聞社を設立するなど、独自性の高い作品が増えた。ICTに長けた生徒はすすんでデジタル形式で作成したが、構想や下書きは手書きで行っており、アナログとデジタルの融合が見られた。

第三弾は集大成として人権新聞を作成した。本校では、人権フェアという学校行事で、30年以上の伝統がある人権劇が上演される。人権劇は3年生一丸となって作り上げるもので、その啓発活動にNIEを活用することで、これまで以上の効果が得られるのではと考えた。まず、劇前に啓発新聞を作成した。劇を構成する役者、道具係、音響・照明係、手話係のそれぞれの立場から、劇の見所や伝えたいことをまとめた。この活動を通して、自分の立ち位置から、自分の力で記事を書く。つまり、自分の思いを確立し、その思いを文章という形にして、見る側である保護者や後輩を意識して伝えるという、主体的な学びができたように感じている。劇後に行われた学年集会では、自分が記事にしたことを中心に思いを伝え合った。これまでの学年集会とは違い、次々と意見がつながり、沈黙の時間はなく、新聞づくりを通して、何を伝えるべきかを胸に刻んだ状態で劇に取り組み、差別解消の思いをより強めることができたように感じた。

また、劇後には学んだことや、今後の生き方についてまとめる新聞を作成した。家庭内で人権意識について語り合うシーンを自分の家庭と重ね、もっと家族と人権について話したいと書いたものや、母親役を演じて、自分のこれまでの行動を見直し、より自分から行動することの大切さを再認識したもの、また道具係という裏方からも劇中に

使用するポスターに思いを込めて描いたというものもあった。普段は大人しく、授業でも発表することは少ない生徒も、学年集会では自ら挙手をして、劇に込めた思いや、今後の生き方について語る事ができた。最も多かった意見は、差別を自分事としてとらえ、差



生徒が作成した体育祭新聞



生徒が作成した人権新聞

別を許さない姿勢を自分から見せていきたいというものであった。劇前後の新聞作りを通して、劇の内容だけでなく、自分の感じたことを記事に載せ、その記事を他学年の生徒や保護者、地域の方々が見ることで、3年生の思いを間接的に取り込み、共有することができた。間接的にはなるが、対話的な学びができたように思う。今年度からは人権劇の後に全校縦割りで行う意見交換の場を設けた。そこで先輩から聞いた生の声を受け止めて劇後の新聞作成に臨むことで、自分の思いと先輩方が伝えたい思いを融合した新聞を作ることができた。この新聞は劇と共に伝統として受け継がれ、これからの人権劇にも思いを乗せ続けることになるだろう。

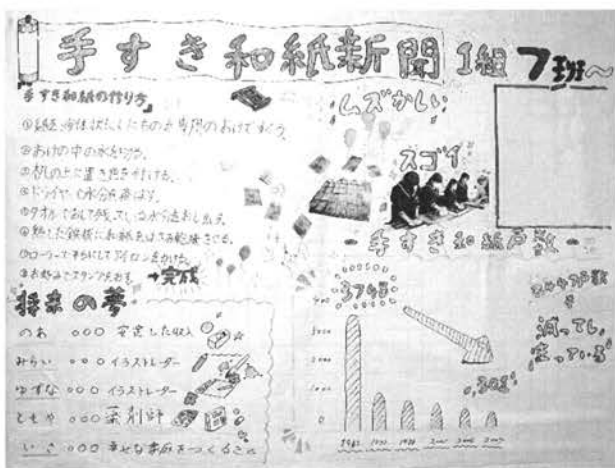
新聞づくりが軌道に乗り、生徒の関心も高まったことで、第4弾として「自分新聞」も作成した。3年生が高校入試の面接に向け、自分が頑張ったことや、自分のいいところをまとめた。取材と題して、学年集会で互いに相手の良いところを伝え合い、面接の自己アピールにつなげることができた。

また、今年度は上記の新聞に加え、1年生が行う「ものづくり講座」のまとめや、教科における活用の先駆けとして「理科新聞」の作成を行った。

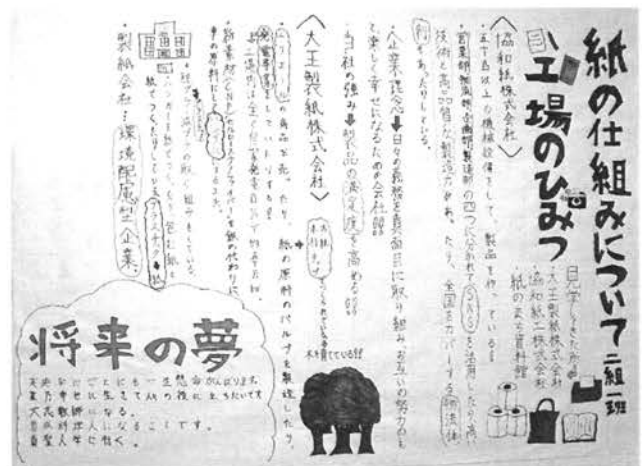
「ものづくり講座」は講話や工場見学を経て、地域産業について学んだことを新聞にまとめて文化祭等で発表した。発表後にはNIEコーナーに掲示し、保護者や地域の方にも見ていただいた。



生徒が作成した自分新聞



生徒が作成したものづくり新聞



「理科新聞」は学習の最後に1年間学んできたことのまとめや、自分が興味を持った単元、内容について各自でまとめ、クラス単位で発表した。

レポートとして自己解決、自己満足で終わるのではなく、自分の考えを周囲に伝えることで、内容により責任をもって伝えることができた。その内容に対して質問や好意的な反応があることで、自己肯定感を高めることにつながった。

植物新聞

花が猿に見える植物 モンキーオーキッド



モンキーオーキッドの特徴
 ・花の姿がモンキー(猿)の顔に似たオーキッド(蘭)と言ったことが名前の由来です。
 ・花茎は二十センチメートルくらい伸びて下垂し、花は下向きに咲きます。

世界一奇妙な植物 ウェルウィッチア



ウェルウィッチアの特徴
 ・ウェルウィッチアはナミブ砂漠に分布される裸子植物です。
 ・寿命が千年以上といわれている。
 ・生涯で一枚の葉っぱしかつけない。

気象新聞

◆空はなぜ青いのか

太陽の光が地球の大気中に差し込んだ際に、空気中の分子とぶつかり、四方八方に飛び散ることで青く見える。そもそも太陽の光は、紫・青・緑・黄・橙・赤など光の波長が異なる光が含まれています。赤は波長が長く、紫は短くなっています。



◆夕日が赤い理由

太陽が地平線に近づく夕方は、昼頃に比べ斜めから光が差し込むため、空気層を通過する距離が何十倍も長くなります。このため、光が空気中のちりやほこりの浮遊物質と衝突する機会が多くなり、波長が短い青色の光は途中で散乱して波長の長い赤色だけが地上に届くため、赤く見えます。



◆感想

今回は、身近な気象の謎を調べました。意外と知らない「空が青い理由」なども調べてみて、太陽の光の色も想像していたより、多くて驚きました。今後、色々なことを知って、たくさん知識を身につけたいです。

生徒が作成した理科新聞

【終わりに】

今回の活動を通して、生徒は自分らしく伝える表現力を身につけ、伝える側の責任も感じ、その内容を実生活につなげることができた。本校の伝統行事である人権劇にNIEの実践を加え、これまで以上に思いの浸透や保護者への啓発につながった。また、進路指導の一環として取り組んだ「自分新聞」では自分の良い所を取材し、まとめることで自己肯定感の向上を図ることができた。

新しい試みであった「ものづくり新聞」や「理科新聞」も生徒の幅広い考えや、見たことがなかった新しい一面を見ることができた。元々人権活動の活性化につなげるためのNIE実践であったが、人権活動だけでなく様々な分野で成果を挙げることができた。

自分の思いを言語化し、内容を精選して新聞として表現することにより、より深い思考力や表現力の向上につながることが実感でき、完成した互いの新聞を認め合うことで、生徒の自信につながった。今後もNIEを通じて、様々な成長につなげていきたい。

全教科制覇！ 学校を挙げてN I E

～教員の体制づくりとICT活用～

松前町立松前中学校／教諭 三好 泰子

1 はじめに（学校紹介）

本校は、県都松山市の隣り、西に瀬戸内海を臨む田園地帯にあり、豊かな自然に囲まれている。また、大型商業施設が校区内にあり、賑やかな側面も見られる。現在、学級数は特別支援4学級を含む14学級、全校生徒数は356名の中規模校である。郷土の偉人、義農作兵衛の残した義農精神（勤労・奉仕・博愛）と、町民の教育理念である「教育の町宣言」の精神は、松前町教育、本校の根幹を支える精神であり、また、「和」の精神に基づく確固とした協力体制の教職員集団と、情に厚く積極的で活力に富む生徒集団が本校の伝統である。

2 N I Eの取り組み

本校は「自らの良さを認め、共に伸びる生徒の育成」を教育目標として、「知、徳、体」の調和のとれた生徒を育成するとともに、保護者、地域から信頼される、活力ある学校を目指している。昨年度からN I E実践校に指定され、新聞活用により、学習に主体的に取り組む態度を育成している。世の中の出来事に興味を持たせ、自分の考えを持ち、それを相手に伝えさせることで、主体的で対話的な深い学びにつなげたい。

3 研究テーマ、内容

(1) 研究テーマ

「一人一人が主体的に取り組む、豊かに表現できる生徒の育成」

～新聞を活用した教育活動を通して～

(2) 生徒に身に付けさせたい力

○新聞から情報を収集し、読み取る力

(知識・技能)

○新聞から読み取った情報を考察し、判断したり、自分の意見を発信したりする力

(思考・判断・表現)

○新聞から主体的に情報を読み取り、自分の意見を発信しようとする態度

(主体的な取組)

(3) 研究部会と活動内容

部会	構成員	活動内容(N I Eの実践に関するもの)
研修部会	研修企画委員	○N I E実践の企画 ○N I Eだよりの作成

教科指導部会	学力向上推進主任を中心に	○校内研究授業を推進し、主体的、対話的で深い学びに向かう授業を目指す ◇新聞に触れる機会の確保、環境の整備 ◇授業における新聞活用の推進 ◇思考力・判断力・表現力の育成
特別活動推進部会	特別活動主任を中心に	○学級活動や生徒会活動において、認め合い、高め合える集団をつくるための「話し合い活動」を充実させる ◇委員会活動、係活動の活性化 ◇特別活動、短学活等における新聞活用の推進 ◇思考力・判断力・表現力の育成 ◇協働の学びによる主体的に行動する力の育成

(4) 研究の実際

ア アンケートによる生徒の実態把握

生徒の新聞活用と社会的な出来事への興味や関心に関する実態を把握するため、昨年度に引き続き、5月に、ロイロノートでアンケートを実施した。本校の生徒の多くが、世の中の出来事に高い関心を示しており、進んで情報を得て、それについて自分なりの意見を持つことができている。しかし、それを発信しようとしている生徒は約半数にとどまっている。また、情報は、テレビやインターネットから得ている生徒が多く、新聞から日常的に情報を得ている生徒は少ない。

イ 各教科での実践

(ア) 国語科「情報社会を生きる」

新聞の記事をもとにリード文、タイトルを考えさせる学習内容。リード文の役割、要約の大切さを理解させた。気になる記事について、感想等をプリントにまとめ、それを互いに読み合い、コメントを書き込むという活動に取り組んだ。「伝え合う」という意識を持って取り組ませるよう指導した。

(イ) 社会科「私たちが生きる現代社会の特色」

学習の導入として「少子高齢化」「情報化」「グローバル化」をキーワードとして記事を検索した。それを基に現代社会の特色について、理解を深めさせることができた。

(ウ) 数学科「方程式、変化と対応、データの活用」

新聞記事から問題を示したり、問題づくりに取り組んだりした。

(エ) 理科「天気とその変化」

新聞の天気図を20日分程度切り取り、重ねて「パラパラ」を作った。それをめくり、天気が西から東へ変化することを理解させた。

(オ) 音楽科

長期休業中の課題として、新聞の音楽に関する記事の中から一つ選び、感想や意見を書き、レポートを作成した。

(カ) 美術科「マンガで表現」標準美術Ⅱ 四国中学校美術連盟編

2・3年生の期末テストで4コマ漫画を描く問題を出題した。教科書の例の他、愛媛新聞と毎日新聞の4コマ漫画を提示し、身近な話題の中から起承転結のあるストーリーを考えておくことを、事前に予告した。中学生らしい、面白い作品を描く生徒がいた。

(キ) 保健体育科「国際的なスポーツとその役割」

課題に関する新聞記事を読み、レポートを作成する活動を行った。

(ク) 技術・家庭科（技術分野）「情報」

アプリケーションの活用の学習で、新聞の株価を標本として、プレゼンテーションソフトでグラフ化し、産業の好不調を考察した。

(ケ) 技術・家庭科（家庭分野）「SDGs」

SDGsについて特集している朝日ジャーナル3・4号を活用した。始めに一人1枚新聞を渡し、興味のあるところにアンダーラインを引き、次にグループでそれぞれの記事が17項目のどのカテゴリーに入るのか話し合った。最後にまとめとして、スクラップづくりをした。

(コ) 英語科「ニュースの中の英語を探そう」

生徒が興味のある内容の新聞記事を準備し、英語で言える表現や知りたい表現を探した。主体的に取り組み、表現の幅が広がった。

(カ) 特別の教科 道徳「あったほうがいい？」

よりよい社会をつくっていくためにはどうすればよいのかを考える際に、新聞からそのヒントを探した。

ウ 朝読書の時間の活用

金曜日の朝読書の時間に◎スタのニュースを読み、感想をロイロノートで提出している。また、特別支援学級では、週に1回記事の紹介文を書いている。回を重ねるごとに「次は何にしようか」と楽しみながら書けるようになってきた。

エ 総合的な学習の時間の新聞作成

1年生は地域調べで、2年生はクミハンを利用し、職場体験学習の新聞作成を行った。愛媛新聞社の方に新聞出前講座をしていただき、意欲的に作成に取り組むことができた。2年生は伊予高校と合同で、成果を発表した。

オ 新聞のある環境づくり

広報委員会は各社の新聞から記事をピックアップし、意見、感想を書いて掲示した。それを見て会話する生徒も見られた。紙の新聞も◎スタも調べ学習の活動においてとても有効だった。また、広報委員会の活動として各学年廊下に新聞コーナーを設置し、自由に新聞を閲覧できる環境を整えた。

2年生の学級活動で、新聞から気になる記事を選び、意見文を書かせた。更に疑問点や発展して調べたくなったことを深掘りさせて、掲示物を作成した。



NIE だより 第10号 2023. 5. 25

6月～7月の新聞購読計画をお知らせします。

	6/12～6/25	6/26～7/9	7/10～7/31
1年	愛媛・日経	朝日・読売	産経・毎日
2年	産経・毎日	愛媛・日経	朝日・読売
3年	朝日・読売	産経・毎日	愛媛・日経

アンケートに御協力ありがとうございました。各教科の取組を御紹介いたします。

(1) 国語科
「情報社会を生きる」
気になる記事についての感想や意見文を書く。記事の中で疑問に思うことや更に深く知りたい内容を決め、情報の集め方や引用の仕方を学習する。気になる時事問題について新聞を活用して調べ学習を行う。調べたことや感想をまとめて、お互いに情報交換、意見交換を行う。情報メディアを比較し、その一つとして新聞を取り上げ、状況に応じたメディアの選び方、日常への生かし方を考える。

カ 終わりの会の時間の活用

終わりの会のスピーチで、◎スタから気になる記事を選び紹介する活動をしている。

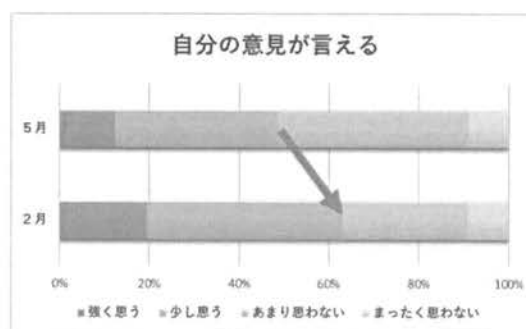
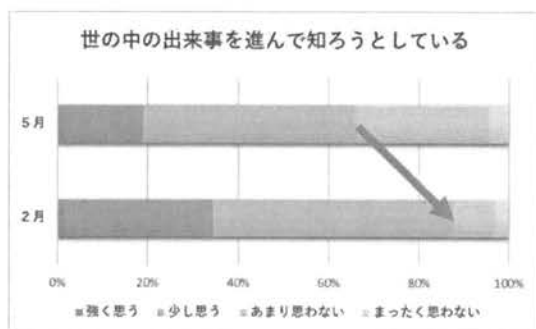
キ NIEだより

研修部ではNIEの参考資料をまとめ、教師向けの通信を作成した。他に、6紙の新聞購読計画や、他校の実践、アンケートの結果等を掲載した。

(5) 研究のまとめ

ア 実践後の生徒の変容 (2024年2月調査)

世の中の出来事に興味があると答えた生徒は増加した。また、進んで知ろうとしている生徒は88%。自分の意見が言えると答えた生徒も増え、63%となった。また、新聞を週に1回は読むと答えた生徒が大きく増えたため、ほとんど読まない生徒は減少した。



イ 成果と課題

実践の成果としては、生徒の自己評価から、世の中の出来事に興味を持ち、自分の意見を言える生徒が増加していることが分かった。これは様々な教育活動で新聞を活用し、主体的に情報を読み取ったり、それを基に考え、判断し、表現する場を設けたりした成果であると思う。社会科の意見文を書く授業や英語科の投稿文を書く授業では、論理的な文章を書く力が徐々に付いてきたと感じている。また、これまで新聞を読んでいなかった生徒の中にも、新聞に触れ、新聞を身近に感じたり活字の良さに気付いたりしたことで、もっと新聞を使いたいという感想を書いた生徒が多くいた。授業中の活用については、「とにかく新聞を使ってみよう」を合言葉に、各教科部会でアイデアを出し合った。

教師の評価としては、身に付けさせたい力と指導と評価の整合性を吟味した評価規準、学習の実現状況の確実な見取り、そして次の授業実践への活用については、今後の更なる検討が必要であると感じた。

この二年間、教師と生徒が一枚岩となってNIEに取り組み、充実した学習活動ができたと思う。研究指定は終了したが、来年度もNIEを継続していきたい。

社会への関心を高め、自分の考えを表現できる生徒の育成

～長～い廊下でN-1グランプリをやってみた～

内子町立内子中学校／教諭 二上 雅史

1 はじめに

内子中学校は、江戸後期から明治時代にかけて製蠟業などで栄えた美しいたたずまいの白壁が特徴的な古い建物が並ぶ重要伝統的建造物群保存地区沿いにあり、全校生徒183名の中規模校である。平成20年度に校舎が新築され、全長約100メートルもある長い廊下や迷路のような教室配置が特徴的な木造平屋建て（一部2階建て）の校舎で、生徒は日々学習に励んでいる。本校では、「自ら考え行動する生徒を育てる」を教育目標として、目標に挑戦する生徒、故郷を誇りに思う生徒、周りに感謝する生徒の育成を目指し、日々の教育活動に取り組んでおり、NIEの活動を通してどんな力を伸ばしたいか、教職員全員で本校生徒の伸ばしたい部分を話し合い、①社会に関心を持つことができる、②自分の考えを深め表現することができる、この2つを目指す生徒像とし、研究を進めることにした。

2 NIEの研究体制と取組内容について

令和4年度からNIE研究実践指定校としてNIEの取組を始めた。特定の学年だけで研究を行うのではなく、全学年でNIE活動を取り入れ、さらには全教職員が関わることを取組方針として研究を進めた。初年度は、他校の実践事例を参考に、できることからやってみようという気持ちで様々な活動に取り組んだ。2年目からは、生徒が主体となるNIE活動の工夫、さらには校舎の特徴でもある長い廊下を活用できないかと考え、「長～い廊下でN-1グランプリをやってみた」という、生徒たち自らが記事を選び、その記事に関するクイズや調べた情報を付け足し、自由な発想で掲示物を作成する活動に力を入れ研究を進めた。

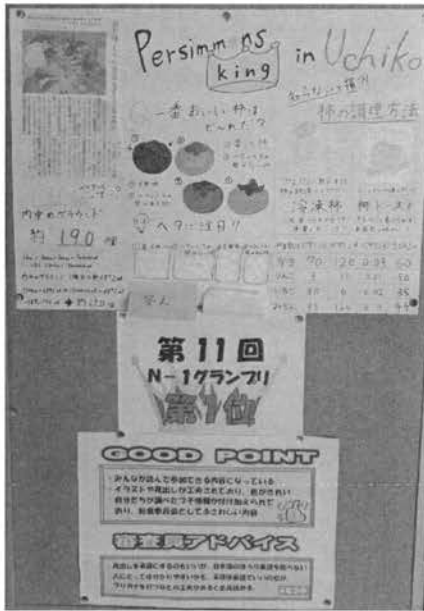
3 研究の実際

(1) N-1グランプリ（新聞記事を活用した掲示物の作成）

生徒が主体的に取り組む、本校の特徴である長い廊下を生かしたNIE活動はできないかと考え、取り組んだのがN-1グランプリである。本校には、11の生徒会専門委員会があり、全校生徒が所属している。そこで、各委員会で学年混合縦割りグループ（1班を3～5名で構成）を作り、他学年との交流もしながら、新聞記事を活用した掲示物を作成し、作品を長い廊下の壁面に掲示する取組を行った。

【N-1グランプリの活動の流れ】

- ①グループで記事を選ぶ。（それぞれが記事を1つ持ち寄り、話し合って記事を選ぶ）
- ②選んだ記事をもとに、クイズや自分たちの意見、イラスト等を加え掲示物を作成する。
- ③教職員が審査基準にしたがって得点をつけながら審査し、結果を発表する。作品には、審査委員コメントを付け、評価できる点や改善点を生徒にフィードバックする。
- ④生徒は、休み時間等を利用して、廊下に掲示された作品を読み、シールで自分の考えを表示したり、クイズに挑戦したりしながら、社会の出来事について知る。



【写真① N-1GP作品】



【写真② N-1GP作品】



【写真③ N-1GP作品】



【写真④ 作成の様子】



【写真⑤ 廊下での掲示】

本校が設定した
審査基準(20点)

委員会	審査基準	得点	得点合計
記入例	①社会への興味・関心を高める内容であるか(記事選び)	4・3・2・1	13
	②新聞記事に興味をもつ工夫をしているか(見出し・レイアウト)	4・3・2・1	
	③新聞記事を活用した内容になっているか(内容)	4・3・2・1	
	④(全体的な)アイデア力・工夫の仕方・着目点・まとめ方	4・3・2・1	
	⑤記事以外に、自分たちで調べた情報が付け加えられている	4・3・2・1	

(2) N I E活動の日 (毎週水曜日、朝読書の10分間を利用)

毎週水曜日をN I E活動の日に設定し、教師が選んだ新聞記事を読み、5W1Hを抜き出したり、自分の意見や感想を書いたりする活動を継続して行っている。また、3年生は、さらなる表現力の向上を目指し、ワークシートに記入した後、数分間、ペアやグループで記事について自分の考えを伝え合う時間を設定した。



【写真⑥ 意見交換の様子】



【写真⑦ ワークシート】



【写真⑧ N I E活動の様子】

(3) 各学級でのスピーチ活動

全学級で朝の会、終わりの会等で新聞記事に関するスピーチ活動を取り入れている。2年生では、友人の発表を聞いて、感想の発表や自分の意見を述べる機会を設け、さらに考えが深まるようにした。自分の知らなかったニュースに出会うことも多く、社会への関心を高めるよい機会となった。



【写真⑨ スピーチする様子】

(1) ICTを活用した活動実践 (◎スタの活用)

ア ◎スタで県内のニュースを読む

水曜日以外の日(週4日)は、毎日、朝読書の前に各自がタブレットで、◎スタのニュース記事を3つ読んでから読書を行うようにした。◎スタには、愛媛県内のニュース記事が掲載されており、比較的身近な地域の話題を知ることができるのが最大のメリットであり、ほぼ毎日行うことで、ニュースを読む習慣が身に付いてきた。

イ デジタルとアナログの新聞づくり(新聞の書き方講座とクミハンの活用)

新聞を作成するに当たり、愛媛新聞社による新聞の作り方講座にて、見出しの書き方などについて学習した。1年生は、総合的な学習の時間で行った調べ学習のレポートを新聞形式にまとめ、手書きで仕上げた。3年生は、修学旅行の後、愛媛新聞社提供の新聞製作ソフト「クミハン」を利用し、タブレット端末を用いてデジタル新聞を作成した。



【写真⑩⑪ 生徒作成の新聞】

(5) 校内環境の整備

ア NIEテラス

木造平屋建ての校舎の特徴を利用し、昼休みに新聞を読みながら友人と談話できる「NIEテラス」を設置した。週替わりで利用できる学年を決め、昼休みに新聞記事の内容を話題にしながら話をする様子が見られるようになった。心身ともにリラックスしながら、気軽に新聞を手にとれる機会となっている。



【写真⑫ NIEテラスの様子】

イ 教職員によるNIEコーナー

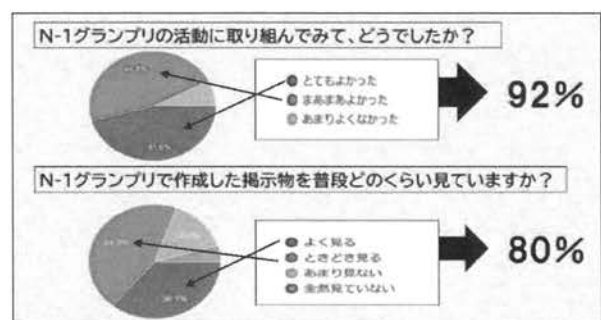
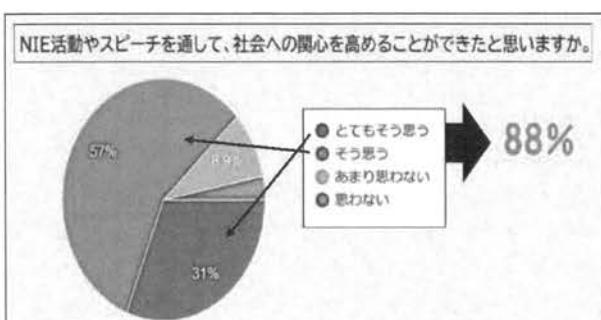
各学年部で担当者を割り振り、職員室前の掲示板をNIEコーナーとして活用した。2週間に1回は、教師作成の掲示物が更新され、生徒は、シールなどを貼りながら自分の考えを示すなど、興味を持って掲示物を見るようになっている。教師も、生徒がどんな記事に興味を持つかを考えながら作成している。



【写真⑬ NIEコーナーの様子】

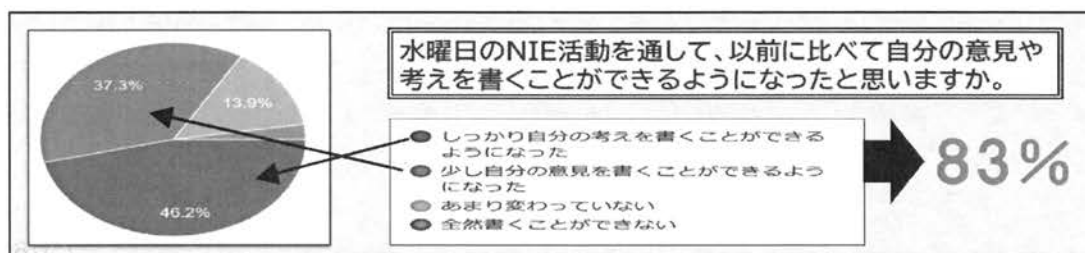
4 成果と課題

(1) 成果



【生徒の感想 ～N-1グランプリの活動に取り組んで～】

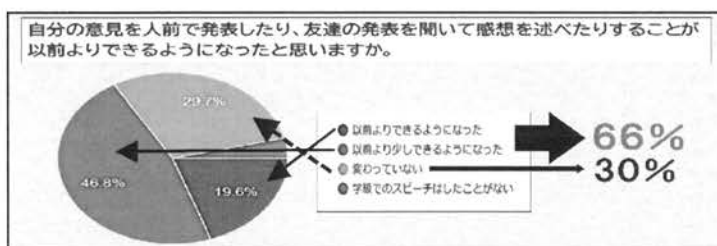
- 記事を分かりやすく伝えるのが楽しいし、先輩との関わりができた。
- 自分たちで記事を選び、たくさんの意見を出し合い活動できた。
- 新聞の内容にも興味を持って、他学年との交流が深められて良かった。
- 今までよりニュースに興味を湧き、新聞を読む機会が増え、社会のことが知れた。
- 自分たちで選んだ記事を、みんなに読んでもらうことがいい。
- 制作は難しかったが、記事の内容を詳しく理解できることが良いと思う。



【生徒の感想 ～毎週水曜日のNIE活動に取り組んで～】

- 新聞の内容を素早く読み取れるようになって、考えをスラスラ書けるようになった。
- 最初は5W1Hが苦手だったけど、今はすぐに読み取れるような力が付いたと思う。
- 新聞記事の内容と自分の体験を結びつけて考えを書くことができるようになった。
- 新聞から情報を読み取る力、考えをまとめ、感想や意見を書く力が付いたと思う。

(2) 課題



- 自分の意見を人前で発表したり、友達の発表を聞いて、感想を述べたりすることが苦手な生徒も多いので、今後は言語活動のスキルを高める工夫をし、原稿なしで自分の考えを伝えることができるような指導方法や活動の工夫を検討し取り組む必要がある。
- N-1GPでは、掲示物を仕上げるのに70分～100分程度の活動時間が必要であり、学校行事や部活動がある中で、活動時間を生み出すのが大変である。生徒と教員、双方の負担にならないように、楽しみながら継続していけるような工夫をしていきたい。

(3) おわりに

アンケート結果や生徒の感想からも分かるように、NIE活動、N-1グランプリの活動、学級でのスピーチを通して、本校のNIE活動を通して育てたい姿は、概ね達成できたと感じています。特に、N-1グランプリの活動は、情報活用能力の育成にもつながるものだと感じ、有効であったと思っています。研究実践を終えたあとも、可能な限りNIE活動を継続していきたいと考えています。

N I E活動を通して行う生徒と地域の未来づくり

～読み取る力・判断する力・表現する力・ふるさとを愛する思いの育成を目指して～

松山市立久谷中学校／教諭 灘野 裕子

1 はじめに

本校は、松山市最南部の郊外に位置する全校生徒251名の公立中学校である。本校は、長い歴史と多くの文化財を有する自然豊かな地域に立地し、伝統を大切にする「まち」の中心として、地域や家庭の協力を得て、教育活動に取り組んでいる。校区には四国八十八か所の札所が二つあり、「お接待」の文化の根付く地域で長年「奉仕」の心を育む努力をしてきた。このような環境の中で生活する本校生徒は、大変素朴で素直であり、「自立・協力・奉仕」の校訓のもと、諸活動に真面目に取り組んでいる。

2 研究のねらい

- (1) N I E活動を通して、読み取る力・判断する力・表現する力を育成する。
- (2) 地域の現状や課題を捉え、課題に対して自分で調べたり伝え合ったりする活動を通して、地域を大切にしようとする心情を育み、「久谷の未来像」に向けて自分にできることは何かを考えて行動しようとする生徒を育成する。

3 本校の取組

- (1) N I E部会（教員組織）とN I E委員会（生徒組織）の立ち上げ
- (2) N I Eコーナー（新聞閲覧コーナーと新聞掲示）の充実

本校では、生徒玄関前の踊り場と各学年の廊下にN I Eコーナーを設置している。朝の登校時、昼休み、放課後と生徒が必ず通る場所に設置することで、新聞に触れる機会が増えた。また、担当教師による新聞記事の掲示も充実させている。



【新聞記事の掲示】



【N I Eコーナー】

- (3) 新聞記事スピーチの実施

各学年から公募したN I E委員会のメンバーが新聞スクラップを行い、それを各学年のN I Eコーナーにジャンルごとに分けて置いている。これらの新聞記事を活用して、毎朝1分間スピーチを行った。スピーチ後、そのワークシートを掲示して、共有化を図った。



【新聞スクラップ】



【ワークシートの掲示】

(4) N I Eタイム（毎週金曜日に◎スタを活用して新聞記事を読む時間）の実施
 毎週金曜日の朝自習の時間を活用し、愛媛新聞forスタディ（◎スタ）のニュース記事を読んでいる。そして、気になる記事を切り取り、感想を書いて、ロイロノートに蓄積している。

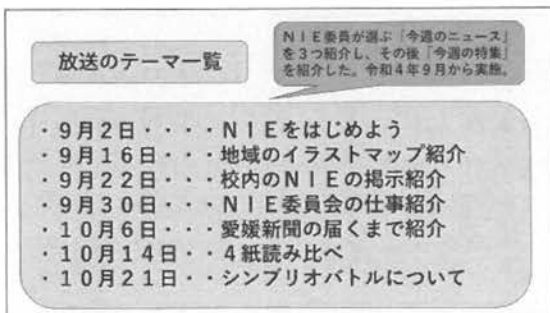


【N I Eタイム】



【ロイロノートに蓄積しているレポート】

(5) N I E委員会放送（気になるニュースや特集記事を給食時に放送）の実施
 金曜日の給食の時間を使ってN I E委員会放送を行った。N I E委員が選ぶ「今週のニュース」を3つ紹介し、その後「今週の特集」を紹介した。



【N I E委員会放送のテーマ】



【放送に用いたプレゼン】

(6) デジタル新聞づくり（新聞作成ソフトを用いた新聞づくり）

愛媛新聞社による新聞づくりの出前講座を活用して、デジタル端末で新聞づくりにチャレンジした。令和4年度は2年生の職場体験学習についての新聞を作成した。令和5年度は、クミハンを活用して2年生の職場体験学習についての新聞、3年生の修学旅行、夏休みの思い出についての新聞を作成した。優秀な作品は、愛媛新聞中学生クミハン新聞コンクールに出品した。



【新聞づくりの出前講座】



【新聞の掲示】

(7) シンプルオバトルの実施

毎日やってきた新聞記事スピーチから自分が最も伝えたい記事を選び、学級で代表を決定し、文化祭で各学級の代表1人がステージで発表した。

(8) デジタルスクラップの実施



【シンプルオバトルで発表する生徒】

令和4年度は、2年生でSDGsについてのテーマに沿って、「@スタ」と「朝日ジュニア新聞」から記事を検索して、デジタルスクラップを作成した。令和5年度は、3年生で地域活性化についてのテーマに沿って、「@スタ」と「朝日新聞けんさくくん」から記事を検索して、デジタルスクラップを作成した。

(9) 切り抜き新聞の作成



【個人のデジタルスクラップ】



【記事を紹介し合う場面】

デジタルスクラップした記事からSDGsのテーマごとの「現状」と「課題」「解決策」を選択し、切り抜き新聞を作成した。地域活性化の学習では、様々な新聞記事の事例が「久谷の現状に合うか」「実行可能か」という観点で記事を精査し、切り抜き新聞にまとめた。また、作成した切り抜き新聞を用いて地域活性化への提言を地域の方々を招いて行った。



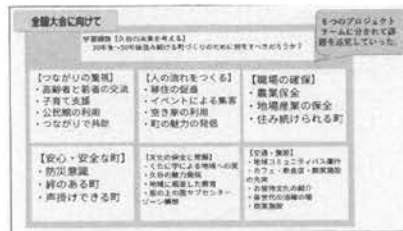
【地域活性化の学習で作成した切り抜き新聞】

(10) N I E 全国大会での公開授業

全国大会の公開授業では、「20年後～50年後住み続ける町づくりのために何をすべきだろうか?」という課題について根拠となる新聞記事を提示し合い、ゲストティーチャーにアドバイスをいただきながらよりよい「久谷の未来像」について話し合った。



【全国大会の授業の様子】



【テーマの一覧】



【使用した思考ツール】

(11) 愛媛新聞ヤング落書き帳・門への投稿

4 成果と課題

(1) 生徒の変容 (成果)

生徒アンケートより (令和3年9月→令和4年12月→令和6年1月)

- ・新聞を週2～3回以上読む 16%→41%→47%
- ・新聞をどこで読むか 家のみ 47% (令和3年9月)
→家 49% N I Eコーナー 50% ◎スタ 23% (令和6年1月)
- ・社会の出来事に自分の意見を持てる 60%→62%→68%
- ・自分の考えをまとめることが得意である 31%→57%→57%
- ・みんなの前で意見を発表することが得意である 26%→41%→46%
- ・N I Eの取組を通して成長したと思うこと (令和6年1月)
世の中を知る力 60% 自分の意見が持てる 60% 表現力 51%
自分たちの未来について考える力 69%

これまでの実践を通して、新聞を身近に感じ、読む機会が増えた。また、N I Eタイムや新聞記事スピーチなどを通して、読み取る力・判断する力・表現する力の向上が見られた。地域活性化の学習を通して、ふるさとを愛する思いを育むことができた。新聞を活用することで、生徒の能力は確実に変容すると感じた。

(2) 課題

N I E全国大会を終えて、今後どのように持続可能なN I Eを展開していくかが課題である。いつでもどこでも誰でもできるN I Eを実践していきたい。

読み手の立場を超えて取り組む探究活動

～読者・記者・取材対象者 三者の視点で考える～

愛媛大学教育学部附属中学校／主幹教諭 富永 剛志

1 学校としての取り組み

(1) 新聞記事に触れる（生徒会活動）

生徒会活動の一環として、学習委員が4社の新聞を毎朝掲示した。三つの面（1面、社会面、地域面）を壁面に掲示し、残りは閲覧台で見られるようにした。なお、三つの面を採り上げた理由は、以下のとおりである。

- ・ 1面は、その日一番に伝えたい項目が一目で分かるようになっている
- ・ 社会面は、1面以外の重要な項目が集約されている
- ・ 地域面は、各社工夫して愛媛で起こっていることを掲載している

ジャンルが違う三つの面を掲示することで、身の回りや地域、日本で起こっていることを自分事として捉えるきっかけとした。また、各社の記事を掲示することで、同じ内容でも見方・考え方が違うことに気付き、多面的・多角的に内容を理解することをねらいとした。



(2) 読者・記者・取材対象者の視点で記事に触れる（朝学習）

朝学習の時間に、「愛媛新聞forスタディ（@スタ）」を活用し、タブレットPCからその日のニュースや気になる記事を検索した。研究の一つとしてNIE活動を位置付け、「NIE週間」として、@スタにある「ニュース学習帳」を利用し、三者（読者・記者・取材対象者）の視点から記事を読み、考える活動を行った。



2. 実践事例

(1) 教科の授業で触れる（1年国語科）

国語科の授業では、@スタを活用し、掲載記事の中の気になった言葉から、作者（記者）の気持ちや意図等が読み取れるかについて思いをめぐらした。事前に小学校時代の教科書や読んだ本等から好きな言葉を選んでおき、紹介し合う活動を通して、言葉の良さを味わい、語彙を増やして表現していくことにつなげた。



(2) 総合的な学習の時間で触れる（3年総合的な学習の時間）

自ら課題を設定し、追究していく「探究活動」の中に、◎スタの活用を取り入れた。生徒は、読み手という立場でしか新聞に登場する他者とつながっておらず、自分事として捉えにくい。そこで、記事の中の人物とつながる機会を、探究活動の中に位置付けた。探究課題の設定・検討の場面では、取材対象者である地域の方と取材した記者に、直接会って意見交流を行った。

【指導計画と学習指導案（一部抜粋）】

○活動計画

回	日時 校時	テ ー マ	活 動 内 容
1 2	5/24 ⑥校時 5/26 ⑥校時	1 探究課題を考えよう	学習の見通しを持つ、仮説・課題の設定 探究課題の再考、資料収集
3 4	6/2 ⑥校時 6/7 ⑤校時	2 探究の見通しを立てよう	活動班作り、資料収集、活動の計画実践 に向けての資料収集や計画
5 6 7 8	6/9 ⑥校時 6/19 ⑥校時 6/21 ④校時 6/23 ⑥校時	3 探究活動の計画を立てよう ※取材対象者・記者と、自分たちの実践を語ることを通して、伝えたいこと、聞きたいこと、したいことを明らかにする。	取材対象者・記者との意見交流① 実践に向けての資料収集や計画訪問先・ 実践活動等の決定、アポイント訪問・実 践のスケジュール決め
9 10～15	6/28 ⑤校時 6/29①～⑥校時	4 課題解決に向けて実践しよう	事前指導、スケジュール確認 現地調査、実践活動（フィールドワーク）
16～19	6/30①～④校時	5 活動をまとめよう	活動のまとめ、発表用資料の作成
20・21	6/30 ⑤⑥校時	6 発表しよう	探究レポートの発表、相互評価
22	8/4	7 意見を交流しよう ※自分の課題解決について、他者と意見交流することで、三者の立場に立って振り返り、経験を広げつなげていこうとする。	取材対象者・記者との意見交流②

○学習指導案（第5回）

1 ねらい

- ・実践者である取材対象者、伝える立場である記者と、自分たちの実践について話し合うことを通して、伝えたいこと、聞きたいこと、やりたいことを明らかにする。

- ・地域の課題や話題に対して、読者・記者・取材対象者の視点を基に考え・表現し、自分の経験をつなげ、広げていこうとする。

2 参加者 HAKUNA MATATA代表者 愛媛新聞社記者 附属中学校3年生

3 展開

活動内容	時間	○具体的な活動内容	・留意事項
1 開会 出席者紹介	5	○本時の活動のねらいを確認する。 ○【出席者】 HAKUNA MATATA代表者 愛媛新聞社記者 生徒代表	・司会とコーディネーターは教員が行う。 ・自身の取組の目的や方法等について明確にしておくために、出席者の方々と積極的に意見交換していくよう促す。
2 取組の紹介	10	○HAKUNA MATATA代表者から、取組の紹介をしていただく。 ○愛媛新聞社記者から、取材した思いや、その思いをどう記事に示していったかについて話していただく。	・パンフレット（4人で1部）
3 三者の立場に立った意見交流	20	○生徒より、出席者へ自身の探究活動と照らし合わせた質問や相談をする。 【テーマ】「私たちが実現したい未来」のために、私たちはどのような目的や方法で取り組めばよいだろう。 ◎「(取材)対象者」の視点で ◎「記者」の視点で ◎「読者」の視点で	・自身の取組について考えている疑問や悩みを引き出す。 ・参加者の方にも、自身の取組や経験を通じた視点や考えを伝えてもらう。
4 取組のふり返り	10	○グループで取組を振り返り、目標や方法について明確になったことや今後の見通し・決意等について発表する。	・本時の活動前後の考えを比較することにより、新たに得た知見や視点を明確にする。
5 参加者の話 閉会	5	○本時の活動を通じた生徒への感想とアドバイス、励ましをお話していただく。	

授業では、取材対象者や記者の思いを、探究活動の目的や意義と照らし合わせて質問したり、考えを述べたりした。

取材対象者や記者からも、探究活動に対するアドバイスや励ましをもらい、改めて自分たちが行う活動の意義や目的、内容や方法について振り返ることができた。



3 実践前後の変化・実践の感想・今後の課題

(1) 実践前後の変化や感想

○全校の取り組みから

- ・生徒は、三つの面の見出しや内容を読み比べて、どのような記者の考えで記事が取り上げられているか、考えを深めていた。
- ・学校生活の中でも新聞を読む生徒が増えてきた。新聞ならではの多彩な表現から、自らの考えを広げたり深めたりすることができた。
- ・記事内容を注意深く読み、「事実」「理由付け」「主張」を明確にして論理的に考察し、表現する生徒の姿が見られるようになってきた。
- ・記事等に込められている思いや背景を多面的に読み取ろうとする生徒が増えた。

○実践事例から

- ・新聞（ニュース学習帳）で取り上げられた取材対象者・記者との意見交流を行うことを通して、三者（読者・記者・取材対象者）の立場に立って自分の考えを深めることができた。
- ・「私たちが実現したい未来」のために、どのような思いを持ち、何を実践していけばよいか、自分自身の生き方と記事（社会の出来事）を重ねて考え、課題解決に向けた心構えを確かにしていくことができた。
- ・記事を通した取材対象者・記者とのつながりを通して、相手のことを知りたい、自分のことを知ってもらいたいという気持ちが高まり、積極的に多様な他者とつながる姿が見られた。

(2) 今後の課題

新聞記事を通して三者とつながる活動は、本校の育ってほしい生徒の姿「学びを多様な他者との関わりの中で発揮していく」に迫る意義のある取り組みであった。ただ、限られた教育活動の中でその取り組みを充実させていくために、非常に時間と労力がかかった。今後は、各教育活動においてねらいを達成するために必要である場面を精選することによって、今回取り組んだ実践を更に効果的に活用していきたい。

新聞記事に身近に触れる取り組みを通して、紙媒体の一覧性の良さや、デジタルの利便性がそれぞれ明らかになった。今後も、紙媒体とデジタルの両面から、地域や社会の出来事を自分事として捉えられる機会を設定していきたい。

進路実現につなげる N I E

～学問領域を見据えた探究活動から～

愛媛県立松山北高等学校／教諭 松田 達也

1 はじめに（学校紹介）

本校は1900（明治33）年に前身の北予中学校として開校し、創立123周年を迎える伝統校である。ほとんどの生徒が大学に進学する中、部活動にも熱心に取り組んでいる。校訓は「文・武・心」で、学業や部活動だけでなく社会貢献ができる人材の育成に努めている。各学年普通科9クラスの全校生徒1,000名を超える大規模校である。

2 取組のねらい

2年生の総合的な探究の時間において、「進路実現につながるN I E」をテーマに、探究活動を通して学問領域への理解を深めさせ、進路選択の一助となるよう取り組んでいる。生徒が4つの学問領域（自然科学・社会科学・人文科学・学際）から一つを選択し、グループ活動を行う。生徒には各自で学問領域に関する新聞記事を中心に資料を収集させる。特に、愛媛県や松山市など地元に関係する企業・行政・教育機関（特に大学）における学問領域に関する取組の事例を取り上げさせる。そして、収集した新聞記事などの資料を取捨選択させ、自分たちが興味関心のある学問領域に関するテーマを設定し、ICTを活用しながら（Teamsによるパワーポイント作成）発表させる。そして、これらの調査・発表の成果を今後の進路選択につながりを持たせる。N I E全国大会公開授業では、生徒が新聞記事などの資料を収集し、精選して整理した内容をまとめて発表する様子を見ていただいた。

また、以下の実践事例にもあるように、公開授業以外のあらゆる学校活動において新聞記事の活用を本校の先生方をお願いした。そのために、図書館に新聞コーナーを設置し、N I E実践指定校の送っていただいた新聞記事を閲覧できるようにした（右の写真：閲覧コーナー）。



3 実践事例

N I E実践指定校を受け、校内での共通理解を図るために松北N I E推進委員会を組織し、教科・ホームルーム活動・総合的な探究の時間・委員会活動など様々な学校活動において、N I E活動に取り組んできた。以下、主な活動を紹介する。

(1) 教科

【歴史総合】

- ・近現代史に関する新聞記事を使って、班ごとに意見を出し合い発表する。

【物理基礎】

- ・物理に関する新聞記事をまとめた「物理ニュース」を作成し、授業で活用する。

(2) ホームルーム活動

- ・身近な記事を取り上げて、ディベートのテーマとして活用する。
- ・人権に関する新聞記事を提示し、班ごとに話し合い発表を通して考察を深める。

(3) 委員会活動

【図書委員会】

- ・NIE実践指定校に配布される新聞各紙を、4つの学問領域（自然科学・社会科学・人文科学・学際）を基準に産官学連携に関する記事を選んで切り抜き分類する。また、一般生徒が活用できるよう新聞コーナーを設置する。

【人権委員会】

- ・毎月1回「北高人権デー」を設定し、人権に関する新聞記事を生徒に読ませて感想を書かせる。感想は次回の「北高人権デー」で生徒に提示し共有する。

(4) 朝コラム

- ・本校では朝読書の時間を毎朝10分設定。隔週で新聞各紙のコラムを3つ取り上げ生徒に読ませて感想を書かせる。感想の一部はロイロノートで共有する。

(5) 総合的な探究の時間

- ・2年生では、新聞を活用した探究活動を実施している。NIE全国大会松山大会の公開授業でその成果を発表した。

【第28回NIE全国大会松山大会公開授業 指導案】

ア 単元指導計画

	1学期 [8時間]	2学期 [12時間]	3学期 [10時間]
主な活動	1 オリエンテーション 2 新聞活用講座 3 産官学連携の新聞記事等で情報収集 4 情報整理、分析、発表資料作成 5 成果発表	1 「産」「官」「学」について考える。 2 「人口減少」をテーマに産官学連携について考える。 3 地域課題について考える。	1 フィールドワークの準備 2 フィールドワーク 3 フィールドワークの振り返り 4 フィールドワークの報告会

【1学期】の主な活動について

○1時間目「オリエンテーション」

「NIEとは何か」「新聞を読むことのメリット」などを説明し、生徒に持参させた新聞記事を使って、新聞記事のテーマや内容を簡単にまとめて発表する。

○2時間目「新聞活用講座」

愛媛新聞の現役記者をお招きして、新聞の見方だけでなく新聞記事を作成するために「どのようにして情報を収集するか」「どのように情報を取捨選択するか」「どのように記事を作成するか」といった具体的な手法を学んだ。

○3～5時間目「情報収集、現状分析、発表資料作成」

2年生を学問領域のグループに分け、そのグループごとに班活動を行いながら、産官学連携に関する新聞記事を調べて情報を整理する。そして、興味関心のあるテーマを設定して、現状・課題・解決方法、さらに学問領域に対する意識がどう変わったかということ、パワーポイントを使用してまとめる。

○6 時間目「事例発表（本時）」

作成したパワーポイントを使って班ごとに発表し、新聞記事をもとに設定、研究したテーマから学問領域に対する意識がどのように進路実現につながったか振り返る。

イ 本時について

- ・目標 班員と協働しながら、産官学連携の事例をもとに現状・課題・解決方法をまとめた活動の成果を、進路につながる学問領域を意識して発表する。
- ・授業の流れ

	主な学習内容	指導上の留意点等	準備等
導入	<ol style="list-style-type: none"> 1 本時の活動について確認する。 <ul style="list-style-type: none"> ・前時までの活動について ・本時の目標について 2 本時の事例発表の説明 	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の流れを説明し、本時の学習内容を確認させる。 ・事例発表について発表班を確認する。 	<p>プロジェクター 個人端末</p>
展開	<ol style="list-style-type: none"> 1 事例発表の方法やルールを確認する。 2 班（4つの学問領域の代表班）ごとに事例発表を行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・自然科学領域 ・人文科学領域 ・社会科学領域 ・学際領域 3 各発表に質疑を行う。 4 事例発表に対する振り返りを行う。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>事例発表の評価シートを使用し、5つの評価観点をもとに発表内容や態度など確認する。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・発表・質疑時間を確認する。 ・学問領域ごとに代表班に発表させる。 ・声の大きさ、発表態度などにも着目させる。 ・班ごとでの発表後に質疑を行い、発表内容を深めさせる。 ・事例発表は評価シートを用いて、自己評価をさせる。評価はロイロノートのアンケート機能により全体で共有する。 	<p>パワーポイント 事例発表記録用紙 評価シート ロイロノート</p>
まとめ	<ol style="list-style-type: none"> 1 本時のまとめを行う。 2 今後の活動について 	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の活動について、目標を達成できているか確認する。 ・今後、自らの進路実現に向けてどのように関連があるのか確認する。 	

4 実践前後の変化、実践の感想、今後の課題

(1) 生徒の変容・感想

2年生の総合的な探究の時間において、新聞記事を活用した地域課題解決に関する探究活動を実施した。日頃新聞記事に触れることの少ない生徒にとって、プラスになることが多かったように思う。紙媒体と電子媒体（「愛媛新聞データベース」）を併用したことで、双方のメリット・デメリットを実感することができた。以下は代表としてNIE全国大会松山大会に参加した生徒の感想である。

- ・今まで産官学を考えたことがなかったため、総合の時間を通して、世の中の出来事には産官学が絡み合っていることを知りました。また、新聞を読むことはほとんどなかったのですが、プレゼンテーションをつくる中で色々な新聞を読み、簡潔で分かりやすい文章だと改めて感じました。パソコンで気になる新聞を検索出来るシステムも、すごく便利でした。企業の方とお話しできたことは、私の中でとても貴重な経験になりました。
- ・地域の課題について新たに気づくことができた。自分たち高校生に実践できることを見つけようと意識するようになった。
- ・これまで産官学連携を詳しく考えたことがなかったが、工学について調べて、課題を見つけ、その解決策について考えるにつれ、産官学の連携はとても大切なことだということがわかりました。
- ・産官学の取組を行うことで、より解決に向けた取組を行えるだけでなく、大学で学んだ知識を最大限に活かすことができる重要な機会にもなると思いました。大学進学後は自分の興味を追求して、その知識で企業と政府が協力してより良い社会が作れるよう取り組んでみたいです。

(2) 教員の変容・感想

NIE実践指定校に指定される前から、本校の人権委員会では新聞記事を活用していたが、指定を受けてからの2年間で授業をはじめとする教育活動で新聞記事を活用する機会が増えた。また、愛媛新聞データベースのような電子媒体での活用が興味関心のある新聞記事の検索に有効であることが認識できた。そして、紙媒体で紙面をめくりながら記事を探し、その記事に関係のある他の記事を愛媛新聞データベースで検索して見つけ出し、スライドなどを使用して授業で提示して問題提起を促すなど、教材化がスムーズにできたことが大きな収穫である。

(3) 今後の課題

NIE実践指定校として、教育活動のあらゆる場面で新聞を活用しようとする動きが見られたのは収穫であり、生徒も地域課題の問い立てや課題解決の糸口を見つけ出すために有効であることを実感していた。課題としては、この成果を継続させることである。来年度以降も愛媛新聞データベースの活用を予定しており、紙媒体と電子媒体を併用しながら総合的な探究の時間を進めるとともに、教科指導や委員会活動など様々な教育活動においても、新聞活用の可能性や教材化の実施事例を共有し、お互い高め合いながら取り組んでいきたい。

「個別最適なまなび」と「協働的な学び」を通して

～新聞から学ぶ地域問題解決策—N I Eの活用～

愛媛県立伊予高等学校／教諭 松本直美・山下千枝

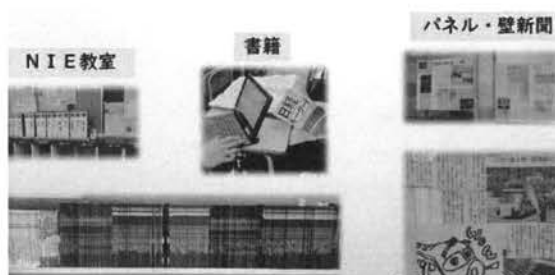
1 はじめに（学校紹介）

松山市に隣接する松前町にある創立41年目の全日制普通科高校で、1年生5クラス、2年生4クラス、3年生3クラスの生徒が在籍している。全国大会出場の常連校である吹奏楽部や全国的にも少ないホッケー部(男女)で有名である。また、普通科でありながら、芸術教育に力を入れており、芸術クリエーションコースも設置している。大半の生徒が大学や専門学校に進学するが、公務員や就職者もあり、生徒の進路希望は多様である。今年度の重点努力目標は、「自らの力で、自らの未来を切り拓く生徒の育成」である。また、「松前町唯一の高校として、多様な科目選択やキャリア教育を推進し、幅広い進路希望に応える」「地域との連携や協働を通して、地域資源を活用した探究型学習を充実させるとともに、広い視野を持ち、地域を支え、未来を切り開く人材を育成する」ことをスクール・ミッションとして、N I EやI C T教育など様々な教育活動を行っている。

2 学校としての取組

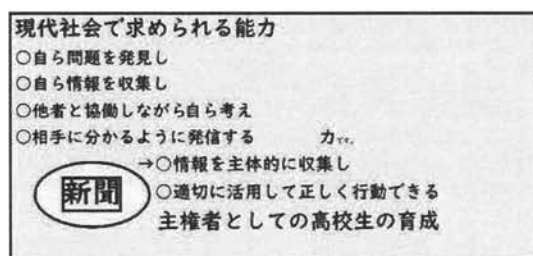
(1) 環境

- N I E教室 ----- 学校設定教科「思考基礎」（2年生・選択制）「時事問題学習」（3年生・選択制）や総合的な探求の時間等の授業で利用
※利用が重複しないように施設予約システム活用
- 書籍 ----- 新聞や時事問題に関連する書籍類購入
小論文対策や集団討論等で活用
- 掲示物 ----- 廊下やパネルを利用して生徒がスクラップした記事や教員が生徒に読んでもらいたい記事を壁新聞として掲示



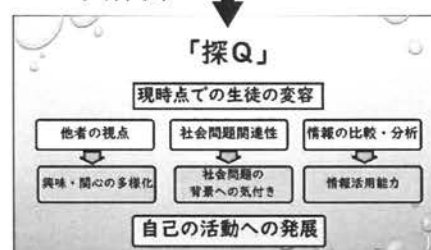
(2) 内容

- これまでのN I Eの取組



各教科・ホームルーム活動等で新聞記事（デジタル含む）を活用

具体例

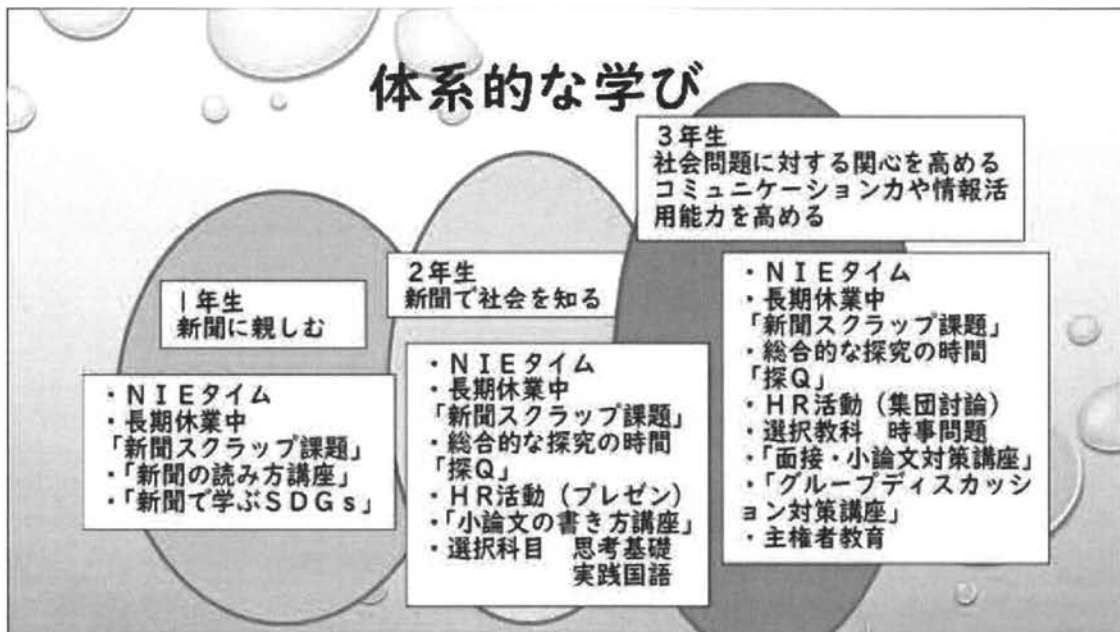


2018年度にN I E推進事業の実践校の指定をいただき、2021年度から4年間継続で再度指定校となった。前回の指定の年に、教育課程の中で総合科目選択制を採用したことにより、「学校設定教科『思考基礎』（2年生2単位）・『時事問題』（3年生2単位）」や「総合的な探究の時間」等、新聞を活用することが年々増えてきている。再度実践指定校になったことを好機と捉え、個々の生徒の進路希望を実現するために、いろいろな場面で新聞を活用した教育活動に取り組んでいる。

その他の具体的な取組例：伊予高校N I E T I M E（毎月1回、学年単位）

「いっしょに読もう！新聞コンクール」（毎年夏休み課題）

「新聞の読み方教室」・「取材の仕方教室」（愛媛新聞社）



○今年度の取組の一例…「はだか麦知名度UPプロジェクト」

・N I E全国大会松山大会発表の経緯

『はだか麦』34年（現在は36年）連続全国1位の地元新聞社の記事から、この探究活動は始まった。近隣の農業高校の特産物を使った商品開発の記事を目にし、「私たちも何かできるかも？」と淡い期待で取り組んだが、活動を進めるうちに「商品開発は、高校生が簡単に取り組めることではない」と分かった。また、取材や学習会時に「栄養価は高く商品として価値はあるのに、知名度が低い。売れない。お菓子にすると割高…」という関係者の悩みを知ることもあった。そこで、別の形で「はだか麦」知名度を上げるにはどうすればよいかを考え、各関係団体に全国大会松山大会で提案をした。

・N I E全国大会松山大会公開授業における提案

- ①新聞記事を用いて、国内外の社会情勢や社会問題について興味・関心を高め、それぞれの抱える課題についての情報を得たり、既習・既得の知識や体験と関連付けて活用したりして、問題解決に向けて必要とされる技能を身に付ける。
- ②新聞記事等で得た情報を比較・取捨・選択して再構成したり、その事象の社会的な背景について考察したりすることで、適切な判断ができる能力を身に付ける。また、他者に自分の思いや考えを適切に伝える表現力を高める。

③単なる知識の習得ではなく、異なる属性の人々と実際に協働して課題に取り組み、次なる課題設定や計画を自ら立案する主体性を身に付ける。また、活動の振り返りを大切に、事後の生かす学びの姿勢を身に付ける。

上記の①～③を基に、18歳成人を意識し、身近な社会問題に対して興味・関心を持つよう日常的に新聞を活用する習慣を身に付ける。また、各分野の専門家や識者によって書かれた文章を読むことで、広い視野で物事を捉え、判断する力を養う。

・「はだか麦知名度UPプロジェクト」探究活動計画（25時間）

★情報を基に課題解決に向けての活動内容を企画する。

時	活 動 内 容	留 意 点
1 ～ 4	テーマ：新聞を活用した情報収集 ・地域課題に関する新聞記事の収集、スクラップ ・関心事ごとにグループ学習 ・地域課題の情報交換	・地域に関連する新聞記事を読んで情報収集し、内容ごとにスクラップし、ファイリングする。 ・友人と情報を共有することで、自分の興味・関心の高い分野について発展的な学習をする。
	テーマ：企画会議 ・地域課題解決対策の立案 ・活動計画・役割分担	・複数の地域課題の中から「探究」のテーマとして適切な内容を選ぶ。 ・問題解決に取り組んでいる学校や企業を新聞記事で調べる。
7 ～ 10	テーマ：関係各所取材・学習会 ・農業高校、ライフデザイン科取材 ・「はだか麦の特性」講義 ・はだか麦の販路取材 ・はだか麦の生産者と販売店取材	・地元新聞に掲載されていた記事を基に、実際に特産品を用いた商品開発や商品宣伝をしている高校生から学ぶ。 ・「はだか麦」に関連した企業や団体を取材し、専門的な知識や情報を得る。
	テーマ：「伊予高校 はだか麦知名度UPプロジェクト」活動 ・広報活動文書作成・松前町や企業への協力依頼・レシピ作成、試作	・文書を作成する際に、活動のねらいや内容が分かりやすく伝わるよう工夫をする。 ・専門家にメニューについて助言をもらう。
15 ～ 19	テーマ：プレゼンテーション作成 ・動画作成講座 ・愛媛新聞社による「新聞の作り方」講座	・効果的な撮影法やSNSの発信方法を専門家から学ぶ。 ・新聞作成時に必要な事項についての実践的な学習をする。
	テーマ：発展学習・振り返り ・活動全体の反省と評価 ・その他の企業や団体の取組について学習 ◎広報活動 地元商業施設で他の団体と協働して広報活動を行う。	・プレゼン ※N I E全国大会松山大会 ・地域内外の広報活動につながるよう、全国大会で指摘された点を改善する。 ・新聞記事を読むことで、次回の企画につながるような発展的な情報収集を心がける。 ・他の団体の取組や実践の新聞記事を基に、効果的な広報活動について分析し、企画する。
20 ～ 25		2月18日 松前町内商業施設で販売促進活動 3月10日 いまばり若者カイギでプレゼン

- ・ N I E 全国大会松山大会発表後の活動（実施できた主な広報活動）



松前町学校給食採用



商業施設での販売促進活動



いまばり若者カイギ参加

3 実践後の変化

「振り返り」アンケートの結果、大半の生徒が「新聞記事を使った学習をする以前よりも地域課題や時事問題に対する興味・関心が高まった」（約8割）と回答している。具体的な感想としては、以下のような内容が多かった。

- ・新聞を読むことで、時事問題について理解が深まっただけでなく、ネットニュースを簡単に信じることの危険性についても知ることができた。複数の記事を比較することで、正しい情報を得る習慣を身につけなければならないと思った。（3年）
- ・自分の意見（小論文等）を述べる際に、裏付けとなることがたくさん記事になっていて単に知識を得るだけではなく、なぜそんなことになっているのか背景的なことも書かれていて新聞記事を読むのが楽しくなった。（3年）
- ・自分が生活している地域以外の話題になっている情報や違う考え方の人の意見を知ることができ、視野が広がったと思う。（2年）
- ・新聞を読む人と読まない人とは、持っている情報や行動の幅が違うのだなと感じることが多く、自分もできるだけ読むようにしたいと思った。（2年）
- ・新聞記事に載っているデータ資料が難しくよく分からなくても、解説的なことが書かれているので、ある程度のことは分かるようになった。（1年）
- ・YouTubeの方が手軽でおもしろいが、配信する人によって真逆のことを言っていることもあるので、信頼性の高い情報源として新聞記事を読むことが大切だと分かった。（1年）

4 今後の課題

学校で、「新聞を読むことの大切さ」、「意義」について語っても、家庭での購読率upにはつながらず、「新聞を読んだ経験」で終わってしまう可能性がある。目の前にいる生徒たちが次世代の地域の担い手であるということを考えれば、成人する上で知ってほしいこと、考えてほしいこと、感じてほしいことについては、学校で教材として扱うことの大切さを感じる。また、新聞記事を活用した活動（授業を含む）を通して指導者も生徒も得るものが多い反面、限られた授業時間の中で、どのように新聞記事を使った授業（活動）展開にするのが課題である。生徒との興味・関心の対象の違いや指導者の力量もあり、授業で扱うことに抵抗がある教員も少なくない。

そのためには、特定の授業に限らず、多くの教科で教材化できるようなシステムが構築されれば、N I Eの輪が広がっていくと感じている。

新聞を視覚障がい生徒の「生きる力」に

～誰一人取り残さない教育を目指して～

愛媛県立松山盲学校／教諭 沖田 栄江

1 はじめに

(1) 学校の概要

本校は、視覚支援を要する幼児児童生徒を対象とする特別支援学校で、今年度創立117周年を迎える。幼稚部、小学部、中学部、高等部普通科、あんまマッサージ指圧師を養成する高等部保健医療科、それに加えてはり師、きゅう師を養成する高等部専攻科医療科が設置されており、児童生徒の年齢の幅が広く、現在、7歳から56歳までの生徒18名が在籍し、一人一人の教育的ニーズに対応した教育活動を行っている。

墨字（通常文字）、点字、音声と、個人の見え方に合わせたツールを使用し、適宜、視覚補助具を活用して学習を行っている。近年のICTの発達により、スクリーンリーダー（画面読み上げソフト）や、デジタル教科書などが普及し、より学習効率は上がっている。ICT機器の活用は、視覚障がい者にとって、学習の習熟を促すだけでなく生活スキル向上のためにも意義深く、卒業後の自立と社会参加にも必要不可欠であり、本校でも力を入れて取り組んでいる。



写真1 読み上げ機能で読む生徒

(2) NIEで目指したこと

たくさんの情報があふれている現代において、本校の生徒は、ややもすれば情報から取り残されてしまう存在である。コロナ禍を経てデジタル端末一人一台配備等も進み、教育の新たな転換点を迎えた今、生徒のICT活用のスキルを高め、情報を自ら得て、自ら判断する力、すなわち「生きる力」を育てたいというのが私たちの願いの一つである。今回、実践校の指定をいただき、様々な方法で新聞記事を読むことで情報を正しく得る力を身に付けてほしい、さらに、それが、自分の障がいを受け入れつつ社会の中でたくましく生き抜く力につながってほしいと願い、NIEに取り組んだ。



写真2 高校生記者取材風景

2 実践の内容

(1) 本校におけるこれまでのNIE

高等部普通科は平成30年から「高校生記者事業」に参加している。学校行事や本校の生徒を取材し、新聞社の方に御指導いただきながら記事を作成し、掲載された記事を読むことで、新聞が格段に身近な存在となった。また、インタビューをしたり、カメラを回して映像番組を作ったりする活動を通して、それまで苦手だった話すことや書くことに積極的になり、成長する姿を実感できた。

令和2年度には、朝日新聞デジタルの記事「『障害は個性』、それ本当？当事者が感じる違和感とは」（2020/9/1



写真3 紙上討論会

0) を題材に、紙上討論会をした。当事者の視点で書かれた記事で、生徒たちの気持ちを代弁した部分もあり、共感しやすい記事と考え題材として選んだ。コロナ禍で集まって話し合うことはできなかったが、「普通」という言葉の捉え方、「障がい＝個性」という言葉の問題点について、互いの意見を交換することができた。力のある教材(新聞記事)は生徒たちの心にも届くことを感じ、N I Eの第一歩となった。

(2) 高等部普通科での取組(令和4年度～5年度)

本校の生徒は、ごく少人数で授業を受けているので、他の生徒の意見に触れる機会が少ない。そこで当該学年に準ずる教育課程で学ぶ生徒を集めてN I Eに取り組んだ。

ア 自分たちが取り上げられた新聞記事の検索

まずは、新聞を身近なものだと感じられるよう、自分たちが所属する「松山盲学校」が取り上げられた新聞記事がどのくらいあるかを調べた。地元紙の愛媛新聞では、1992年～2022年11月までに553件あった。

次に、令和4年度に取り上げられた記事について調べた。本校生徒が関わった、視覚障がい者も楽しめるゲームアプリ開発協力の記事(2022/10/8愛媛)(2022/10/21朝日)や、視覚障がい者に便利な歩行者支援アプリの記事(2022/3/9愛媛)(2022/3/9読売)など、自分たちが携わったことが記事になっており、生徒たちは興味深く読むことができた。新聞社が異なると表現も変わることなども比較することができた。

この際利用した愛媛新聞社の『@スタ』は、音声読み上げにも対応しているので、弱視生徒だけでなく、点字使用者、音声使用者にも、新聞を読む行為へのハードルが下がった。

東京パラリンピックのメダリスト(視覚障害・陸上・ユニバーサルリレー第1走者)が来校し、交流した記事(2022/10/12愛媛)は、高校生記者として自分たちが発信した記事(2022/11/7愛媛)との比べ読みができ、同じ内容の出来事でも視点が違うと表現が変わることを学んだ。

また、本校に関する記事を、松山市立久谷中学校の生徒が「シンプリオバトル」という行事の発表の中で取り上げてくれたことを知り(2022/1/16愛媛)、自分たちに関する記事が、校外の人に影響を与えることがあるという気づきを得られたことは収穫だった。

この記事検索、読み直し、比較読みの作業を通して、生徒たちは、新聞との距離感を縮め、社会と自分たちがつながっていることを感じる事ができた。

イ 点字図書館に関わるコラムと記事

点字図書館で、点字化や録音の許諾依頼に対する作家や著名人からの返信を2,000通近く保管しているというコラム(2022/9/6愛媛 地軸)、次に本紙の記事(2022/8/29愛媛)を取り上げた。点字使用の生徒は、今、点字図書館が所有するデータを自由に手軽に閲覧できているのは、多くの人の苦勞があつてのことだという気づきを得て、「読める幸せ」というタイトルに共感できたが、点字図書館を利用しない生徒の反応は薄かった。



写真4 掲載された記事



写真5 生徒が書いた記事

ウ 「目が見えなくてかわいそう？全盲ユーチューバーが伝えたいこと」(2022/12/26朝日)

生徒たちが共感しやすい題材を、と思い、障がい当事者の書いた記事を選んだ。記事に登場する全盲ユーチューバーの怒りに共感する一方で、弱視の生徒の中には「全盲なのにユーチューバーすごい。」「自分も全く見えなくなったら絶望する。」という意見を出す者もいた。視覚障がい者と一口に言っても、障がいの程度や見え方は様々で、障がいに対する受け取り方もそれぞれ違う。当事者である「視覚障がい」を扱ってさえも、全く同じ目線で感じたり考えたりするのは難しいことが分かり、「障がい」をテーマに扱う難しさを感じた。

エ 多様性を認める社会を目指したコラム(2023/2/11 愛媛 地軸)

LGBTなど性的少数者への差別発言を取り上げた新聞のコラムを読み、真に平等な社会、また共生社会とはどういう社会なのかを考えた。生徒たちはLGBT等に対する人権意識も高く、同性婚を認めるべきだという意見が多かった。このコラムに引用されたNPO法人東京レインボー共同代表の言葉、「『皆平等に』



写真6 話し合いをする生徒

と全国民にSサイズのTシャツを配るとする。結果着られる人と着られない人が出る。」という比喩的な表現が生徒の印象に残り、「一人一人に合うTシャツを配るのが『平等』だ。」と結論付けた。その後で、どんな問題も他人事ではなく、相手の立場に立って自分のこととして捉える力を見に付けてほしいと思い、「当事者ではない話題だから、無意識に多数派の方に自分の身を置いていないか？この話題が『障がい』だったなら、あなたも少数派＝Tシャツを配られない立場になるのでは？」と問うと、そこで初めて「自分のこと」として考えられるようになり、共生社会に対する考えが深まったと感じた。

オ 「『車いす』多数派『二足歩行』少数派になったら？

障害生み出す社会を実感 バリアフルレストラン」(東京新聞Web 2023/2/25)

愛媛県立伊予高校との交流学习の中で「共生社会を目指して」と題し、意見交換会を行った。総合的な探究の時間の一環で本校を訪れた7名の生徒と、1度目は視覚障がいについての学習をし、2度目はこの記事に対する感想をもとにディスカッションした。



写真7 伊予高との意見交換会

この記事は、車いす使用者が多数派で二足歩行者が少数派という逆転した世界を体験する「バリアフルレストラン」というプログラムを紹介したものである。これまでのNIEの実践から、障がいの有無、年齢、性別にかかわらず、相手の立場や少数派の立場に立つ



写真8 伊予高生から寄せられた意見・感想

のは難しいものだと感じていたが、この記事は、多数派(ここでは二足歩行)の自分たちが、いかに「傲慢」に生活しているかを理解しやすいものだったので、題材に選んだ。

「多数派」「少数派」どちらの立場も分かる本校の生徒には、適切な支援を受けながら社会の中で臆さずに生きていける力を身に付けてほしい、伊予高校の生徒たちには、本校の生徒たちが感じている「障がい者と言われて上から目線で見られるもやもや感」を感じてほしい、そして両校の生徒に、障がいを作り出して

いるのは本人の側ではなく、社会や環境の側であるという考えを理解してほしい、というこちらの願いに応え、皆、真摯にそして意欲的に意見を出してくれた。本校の生徒からは「自分たちからも発信して社会に参加したい」「自分たちは少数派だと思い込み、支援される存在であることに慣れていた」、伊予高校の生徒たちからは、「支援や好意だと思っていることが『上から目線』だったり、自分が当たり前だと思っていることが思い込みだったと感じた」「互いを知ることが大事」という意見があった。一本の記事を介して他人の意見を聞き、考えを深められるいい機会となったし、工の取り組みからは格段に共生社会に対する考察が深まったと感じた。



写真9 伊予高との交流の記事

カ 全国大会以降の取り組み

高校生記者としての記事を2本作成した。1本目は、本校で9月17日に行われた「科学ヘジャンプ イン松山」についての体験記（2023.10.30愛媛）、2本目は、松山南高校物理部が松山市の依頼を受けて作った松山城のジオラマを触察し意見交換した行事と、その後松山城に実際に出向いてジオラマの効果を確認したことについてである。（2024.3.17愛媛）



写真10 科学ヘジャンプの記事

写真11 松山城ジオラマの記事

また、3月8日に本校で行われた平和と学習「被爆者体験証言講話」の事前指導として、平和に関するコラム（愛媛新聞 地軸2024/3/2）や、戦争に関する記事を読んで意見を出し合った。

3 成果と課題

生徒たちは、多くの記事を読むことで、新聞を身近に感じ、社会で起きている問題に興味を持たれた。論理的に意見を発表する機会も増えたことも収穫だった。しかし、教師が「与えた」記事を読んでいるにすぎず、教師のフィルターを通したものであるということが最大の課題で、記事を自ら選んで読む意欲までは喚起できなかった。新聞記事を墨字（活字）でない方法で読めるようになると、新聞と視覚障がいのある人たちとの距離がもう少し縮まるのではないかと思う。

NIEの一番の成果だと感じたのは、生徒たちが自分の障がいについて改めて見直したり、当事者として発信することの重要性に気付いたりできたことである。そして、「共生社会とは？」という問題を、障がいのある立場から深く考え、自分たちが社会の中でどう生きていきたいかを考えることができた。そのことが、社会福祉を学びたいと大学に進学したり、第43回全国高校生読書体験記コンクールで優良賞を受賞した生徒が出たりと、生徒たちそれぞれの心の成長や生きる力を伸ばすことに貢献できたと感じている。

全国大会での実践発表をきっかけに、各地の新聞社の記者の方々や他県の特別支援学校の先生方とやり取りをすることができ、私自身も貴重な経験となった。

発表の場でも御指摘いただいたように、社会から取り残されないよう自ら情報を入手するだけでなく、自分で情報の真偽を見極める力を育成していく必要性は高まっている。かなり困難なことではあるが、その目標に近付けるよう今後も取り組みたい。

愛媛県NIE推進協議会委員名簿

(2023年度)

会 長	馬越 吉章	愛媛県小中学校長会 会長 今治市立南中学校 校長	〒 799-1513 今治市松木349-1 TEL 0898-48-2546 FAX 0898-48-6518
委 員	池田 哲也	愛媛県高等学校長協会 会長 愛媛県立松山南高等学校 校長	〒 790-8506 松山市末広町11-1 TEL 089-941-5431 FAX 089-933-3114
委 員	宮岡 真司	愛媛県教育研究協議会会長 伊予市立郡中小学校 校長	〒 799-3112 伊予市上吾川110 TEL 089-982-0168 FAX 089-983-1503
委 員	沖田 浩史	愛媛県高等学校教育研究会 会長 愛媛県立松山東高等学校 校長	〒 790-8521 松山市持田町2丁目2-12 TEL 089-943-0187 FAX 089-934-5766
委 員	中村 道郎	愛媛県私立中学高等学校連合会 会長 愛光中学・高等学校 校長	〒 791-8501 松山市衣山5丁目1610-1 TEL 089-922-8980 FAX 089-926-4033
委 員	中島 康史	愛媛県総合教育センター 所長	〒 791-1136 松山市上野町甲650 TEL 089-963-3111 FAX 089-963-3146
委 員	竹村 京子	愛媛県教育委員会事務局指導部 義務教育課 指導主事	〒 790-8570 松山市一番町4丁目4-2 TEL 089-912-2940 FAX 089-934-8684
委 員	近藤 啓	愛媛県教育委員会事務局指導部 高校教育課 指導主事	〒 790-8570 松山市一番町4丁目4-2 TEL 089-912-2950 FAX 089-912-2949
委 員	加藤 令史	日本新聞協会NIE委員会 委員 愛媛新聞社 専務取締役	〒 790-8511 松山市大手町1丁目12-1 TEL 089-935-2131 FAX 089-947-7076
委員・監査	広島 敦史	朝日新聞社 松山総局長	〒 790-0003 松山市三番町4-9-6 NBF松山日銀前ビル5階 TEL 089-941-0155 FAX 089-941-0125
委 員	太田 裕之	毎日新聞社 松山支局長	〒 790-0001 松山市一番町3-3-6 センターポイントビル5階 TEL 089-941-2711 FAX 089-932-4568
委 員	原 典子	読売新聞社 松山支局長	〒 790-0003 松山市三番町4-9-12 松山電算ビル3階 TEL 089-933-4300 FAX 089-933-4302
委員・監査	前川 康二	産経新聞社 松山支局長	〒 791-8012 松山市姫原3丁目3-36 グランシャトレ姫原601 TEL 089-922-9005 FAX 089-922-9005
委 員	平片 均也	日本経済新聞社 松山支局長	〒 790-0003 松山市三番町4-11-5 TEL 089-941-0349 FAX 089-932-2161
委 員	小西 大輔	共同通信社 松山支局長	〒 790-0067 松山市大手町1-12-1 TEL 089-941-0128 FAX 089-943-6612
委 員	寺尾 貴之	時事通信社 松山支局長	〒 790-0067 松山市大手町1-11-4 TEL 089-921-6101 FAX 089-921-6102
事務局長	村上ともこ	愛媛新聞社 地域読者局読者部副部長	〒 790-8511 松山市大手町1丁目12-1 TEL 089-935-2013 FAX 089-946-9015

(2024年2月末時点)

愛媛県NIE推進協議会

〈事務局〉

〒790-8511 愛媛県松山市大手町1-12-1

愛媛新聞社地域読者局読者部内

TEL 089-935-2013 FAX 089-946-9015

https://www.ehime-np.co.jp/online/hiroba/nie_ehime/